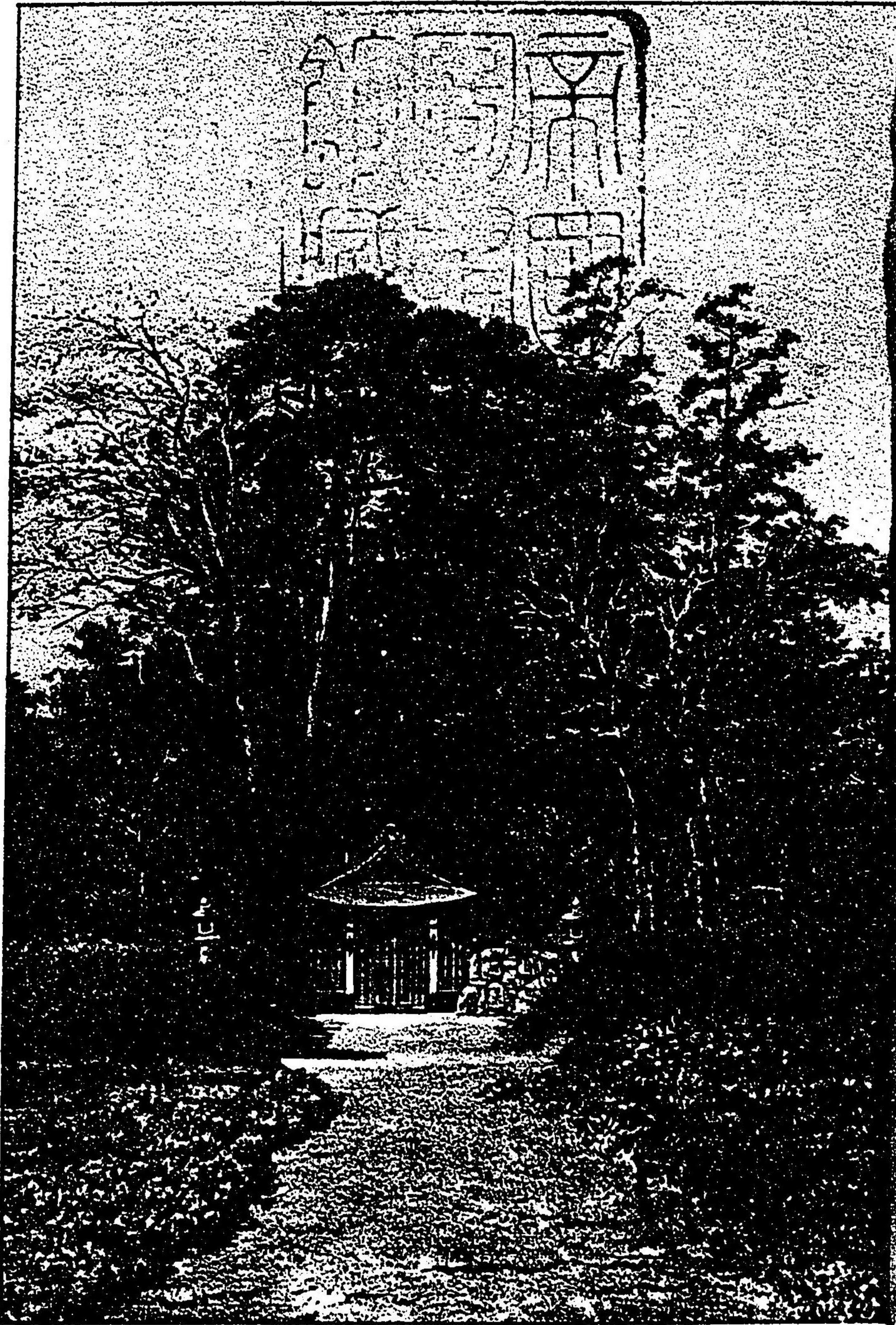
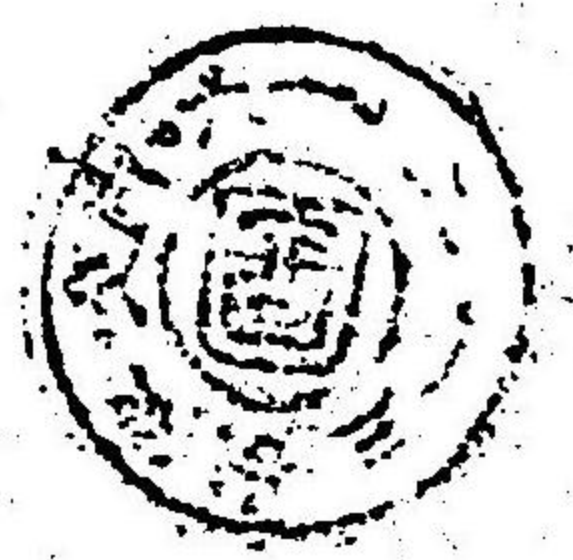


山科慧燈大師御廟



204
2
217



特 8

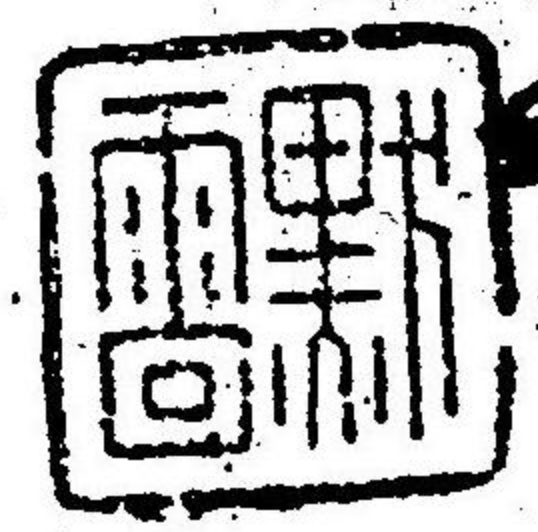
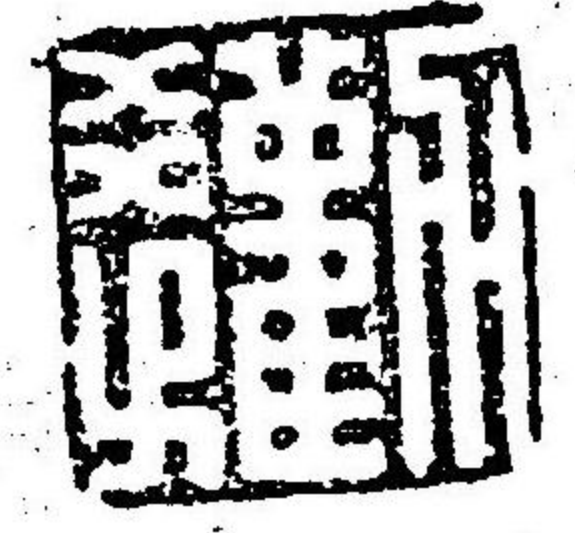
730



漢
陽
物



法
黙
雷
題



あふれ福幸此院主小野島初基師のいされ
もやうはいしるのまゝ徳地別院の伊使傍を
勤め侍時我の守祖 慧燈大師は親製の
版解のまゝとい毎の續巻よまゝし
松教一侍のまゝ侍直の社印
日々お能ふまはしるにのまゝしあ
日しゆまるとまゝしるにのまゝしあ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. The script is dense and characteristic of early modern European cursive. The document appears to be a page from a book or a set of accounts, given the structured layout and the use of a vertical line on the left side.

信子
の
手紙

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

信子

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~


此書は吾小野島師本年四月築地別院へ出張せられ懇篤なる説教有し時隨行のおのれ隨聞隨記して法味愛樂の助縁の爲しるし置し物にて敢て諸君のため物せしに非らざりしを今回道友諸兄の勧めにより師の許可を得てよにおはやけにいたす事とはなぬさるにおのれの筆記は聞あやまりも書あやまりもありはた彼の速記の法をも辨へされは所々に脱落もありて殊によみかねしをかくやすらかに筋のとほりしはひとへに師の養嗣になる法幢君のちからなりければこれを明言して深く同君の勞をも謝す

源信和尚は往生要集を御製作になり其大尾に至り問因
 論生論多日染筆苦勞身心其功非無期何事耶答依此諸功
 德願於命終時得見彌陀佛無邊功德身我及餘信者既見彼
 佛已願得離垢眼證無上菩提と仰せられたり此書出版の
 目的も此他はあらずされは未決の人は速に信心を決得
 と己信の人はますます法味愛樂自他平等二世安樂の身
 の上となり給はんことをこひねがふ而已穴賢

明治三十年十二月

龍澤自慶誌す

眞俗 二諦 領解文百席談上巻目次

○序辨	初	頁	○二郎三郎の領解	十七	頁
○加島屋老母の自督	四	頁	○鸚鵡の喩	十七	頁
○文明開化の辨	八	頁	○安心の鑄形	十八	頁
○進歩の世の中	九	頁	○尸伽羅越長者の因縁	廿	頁
○弘誓の船	十一	頁	○六方禮經の大意	廿一	頁
○因縁和合の辨	十二	頁	○製作の由來	廿二	頁
○網を曳けば目皆張る	十四	頁	○子になりかはる親の慈悲	廿三	頁
○言は易く行は難し	十六	頁	○改悔批判	廿六	頁
○鳥窠禪師の教誡	十六	頁	○忠臣蔵の話	廿八	頁
			○國姓爺の話	廿九	頁
			○二種の立題	卅	頁

○改悔に付き自他の區別	卅三頁
○領解の解	卅五頁
○扁鵲の奇術	卅六頁
○領解と改悔の配當	卅九頁
○一宗の憲法	四十頁
○法如上人の法語	四十一頁
○四科の略辨	四十三頁
○安心決定の相	四十七頁
○安心相續の相	四十八頁
○小兒剃髮の譬	五十一頁
○出体釋名	五十五頁

○雜行の解	五十六頁
○疎雜の義	五十七頁
○雜毒の義	六十二頁
○慈惠僧正	六十三頁
○寬明僧正	六十三頁
○雜修の解	六十五頁
○資助の義	六十六頁
○助伴の義	六十八頁
○部類の雜修	七十一頁
○盲兒の譬	七十二頁
○栴檀香木の譬	七十五頁

○自力の心	七十七頁
○ランプの喩	八十頁
○一口諭の實談	八十二頁
○ナイフとサーベル	八十四頁
○蓮生坊の短氣	八十九頁
○一心	九十五頁
○一男兩妻を持つ喩	九十六頁
○雪舟の幼時	九十七頁
○兆殿司の幼時	九十八頁
○一の言は無二に名く	百四頁
○合三爲一	百六頁

○論主の一心	百七頁
○闇去明來々々闇去	百九頁
○阿彌陀如來	百十二頁
○光壽二無量	百十四頁
○元就公少年大志の話	百十五頁
○壽命無量のこと	百十八頁
○元就公御遺訓八ヶ條	百廿一頁
○家康公黒本尊の靈驗	百廿四頁
○辟地の奇談	百廿七頁
○阿彌陀釜	百廿九頁
○阿彌陀佛の三義	百卅頁

- 阿彌陀如來 百卅二頁
- 阿彌陀の三訓 百卅四頁
- 攝取の義 百卅六頁
- 雲居寺の本尊 百卅七頁
- 朝夕の逃仕度 百卅八頁
- 回向の義 百四十頁
- 寶藥屋某の話 百四十一頁
- 飛脚屋の息子躰の話 百四十五頁
- 老婆旅中病死の話 百五十二頁
- 往生の義 百五十六頁
- 入道西忍 百五十八頁

- 流行物と必要物 百六十二頁
- 心の世話 百六十五頁
- 眞宗二諦の教育 百六十八頁
- 一大事の後生 百六十九頁
- 無常 百七十二頁
- 病婦の述懐 百七十四頁
- 小野小町と和泉式部 百七十七頁
- 無常の利益 百八十頁
- 六方禮經の趣意 百八十三頁
- 盛者必衰の習ひ 百八十五頁
- 扁鵲と桓公 百九十頁

- 華嚴の鳳潭 百九十四頁
- 英照皇太皇陛下の崩御 二百二頁
- 同陛下佛教御歸依 二百六頁
- 同陛下の御大葬 二百九頁
- 神葬と神道の關係 二百十一頁
- 佛教と國葬の關係 二百十三頁
- タノムの正意 二百十六頁
- タマへの三義 二百十九頁
- 一休和尚と蓮如上人 二百廿四頁
- みなし兒 二百廿五頁
- 形屋五左衛門の化導 二百廿八頁

- タノムは信の和訓 二百卅一頁
- 勢觀房慚悔の事 二百卅三頁
- 助け玉へとタノム 二百三十七頁
- 明詮律師立志の因縁 二百四十一頁
- 申すの釋義 二百四十二頁
- 承上起下 二百四十三頁
- タノム一念 二百四十四頁
- 嫁入の譬 二百四十五頁
- 一念の二釋 二百四十七頁
- 吉野の高僧 二百五十頁
- 元祖聖人 二百五十二頁

○禪勝房	二百五十三頁
○慈鎮和尚	二百五十四頁
○入正定聚の益	二百五十五頁
○一如律師の話	二百五十六頁
○諸佛證誠	二百六十頁
○庄松同行	二百六十二頁

眞俗 二諦 領解文百席談上卷目次終

眞俗 二諦 領解文百席談上

小野島行薰師演述

第一席

此度は久振に當別院の出張致しまして。之より追々席を重ね座を逐ふて。御取次に及ぶ事でありませす。先年婦人教會御取設の砌。初め出張致しましては。妙齡の貴婦人。令嬢の方が千有餘名も御入會に相成。非常なる御繁昌で御座ました。如何にも文明の中心たる東京の御別院にて。末世相應の要法たる。我二諦相資の御法の御弘通に相成ることを。大善知識に於せられても。深く御満足に思召された事でありませす。然るに有爲轉變の世の有様とは申しながら。其

後間もなくさしものに輪奐美を極めたる御本堂を始め。御對面所御座敷に至るまで御焼失に相成り。大善知識の御歎きは申迄もなく。我々一同當惑致しました事でありませう。何分にも他の御別院とは違ひ輦轂の下にある御別院の事故。一日も速に御再建遊ばされたい思召は勿論。信徒諸君の方々も頻に御再建を熟望して居られまする所より。大善知識御東上にて御直諭あらせられ。右御披露として再び出張申付られました。募縁に着手致しました處が。扱はや皆様方非常の御奮發で。前川氏は五千圓。天野藤倉の両氏は二千圓宛。其他の御勘定御世話方より。各々千圓五百圓等の御取持にあいなり。或は毛利家小笠原家等の華族貴顯紳士の方々よりも。千圓又は五百圓と云ふ様に。御寄附になり。僅の間に七八萬圓の高になりましたは。局外の人々までが驚く程の勢で。此有様なら遠からぬ内舊觀に復す

る事と。一同喜で居ります處に。御承知の通り日清戦争となりまして。止を得ず一時御再建を御見合に相成りましたが。何れ遠からぬうち御再建の御發令にも相成事と考ゑます。就ましては皆様方も先年の勢を挫けさせず。精々御取持を願ひます。偕て此度御取次を致すに就きましては。御承知の通り。中宗大師四百回忌の御遠忌も。最早來年と相成り御本山に於せられても。大師號宣下以來初めての御遠忌に付。別して丁重に御親修あらせらるゝ事と。昨年來御待請の御準備に付ましては。容易ならぬ御混雜の事でありませう。旁の御縁により今回は領解文を御讀題に供へ二諦相資の御理は勿論。蓮師御一生の間宗門御再興のため。一方ならぬ御苦勞あらせられたる御履歴に至るまで。委く御取次致す積故。何卒引續て賑々敷參集を遂られ。見佛聞法の勝縁に逢ひ奉らりよふぞなれば。何より以て其の身

くの仕合。此上もなひ次第であります。ツイ御領解文の御取次と
 聞れましては。云何な童小供に至る迄耳馴て居る事故。輕々しく思
 はるゝ族もあるか知れませんが。我淨土眞宗の御流義は。三經七釋
 を始め祖師善知識の御化導。汗牛充棟も當ならざる程の澤山なる御
 聖教はありまして。つゞまる處此一紙の法語たる領解文の外には
 御座りません。此御理が明になりますれば。淨土眞宗の安心も捉も
 悉く備はる事故幾重にも大切に。篤と聽聞せられいではなりません
 先年御本山より大阪十二講へ御安心しらべとして。薩州師が御出張
 になりまして。其節の事でありませす。御承知の通り御東では名古屋
 御西では大阪と云ふ程の處で。中々大阪は御法義御繁昌の地です。
 又御門徒には非常な金満家も澤山な事。サ一今度は薩州師が我々
 の安心を調べに御下になると云ふ事であるから。有縁の客僧を自宅

に招待するやら。宗意安心の學者を訪ふて。自督の領解を聞て貰ふ
 と云ふ有様で。五日も十日も前から。彼處も此處も。大混雜を致す
 と云ふ有様。そこへ薩州師が下られまして。津村御堂に於て御取調
 になりますと。誰も彼も立板に水を流す様にさらくゝと自督の安
 心を出言致します。其中に名高き仰信の聞へのある加島屋の婆さん
 が出られますと。薩州師が申さるゝには。豫て噂に承りて居る。加
 島屋の御婆さんとは御前さんでありますか。大切に御法義相續が出
 來まして。何より結構の事であります。つきましては此度有縁の大
 善知識。大坂の同行の出離の大事を御案トあらせられ。不肖なる拙
 僧を態々御使に相成ました事故。御前様の豫での自督安心の次第を
 委く承りたひと申されますと婆さんは涙ながらにさてゝ難有思召
 と。一禮を述べられまして。もろくの雜行雜修自力の心をふりすて

。一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生。御助候へとたのみ申して候と。此領解文の上を其儘拜讀致して居られますから。薩州師が。御婆さんそれは蓮如上人の御製作あらせられたる領解文ではないか。その御法語を聞に來たのではない。御前さんの自督安心の出言を取調に來たのであると申されますと。又繰返してさて、難有思召で御座いますと一體を述べて。もろくの雜行雜修自力の心をふりすて、等と。相變らず領解文を讀で居られすと。薩州師が之はらたり。又してもろく蓮如上人の御言葉の口眞似とは。ドー云ふ事であるかと御尋になりますと。お婆さんの言はれますには。それはあなた御無理と申すもので御座います。私如き愚な者が云何な結構を御化導にあづかりましたも。直に忘れて一文一句の出言も出來ませぬが。只々この御領解文の御化導のまゝ。雜行すて、彌陀を

たのみ雜修を離れ本願に縋り。露聊も私の計ひを交へず。一心一向に阿彌陀如來後生御助け候へと。往生の大事に安心させて戴くの外は。何も變る領解も私には御座りませんと。涙乍らに出言致されますと。薩州師は横手を打て。さて、音に聞へた御同行程ありて。繕もなく飾もなく蓮師の御言葉の其なりを。出言致さると云ふは實にあり難ひ事である。此趣を歸京の上善知識へ申上たら。嗚々御満足あそばす事で御座ろふと。讚歎せられた御咄が御座います。實に味のある物語では御座りませんか。此味を噛らめて聽聞致しますれば。戴てもろくあきたりのない。廣大なる御慈悲の程が。自然に顯れて出る事故。ドーか成丈差繰をいたされて。日々御參詣が何よりの肝要。

第二席

御互に萬物の靈長たる人間世界に生を受け。殊に萬國無比の大日本帝國の臣民と云はるゝ身の上。徒らに肉體の快樂をのみ貪りて。精神の快樂たる安心立命の地位に達する事を。求めないと申しまゝては。實以て殘念千萬の事でありませす。イヤ文明とか開化とか誇りまゝしても。云何なる因縁に依りて此世に生を受けたか。ドーいふ筋道で未來へ赴くのか。何故人と云ふ名目か付たものかと云ふ詮議もせず。食ふて吞て寐て起て死んで仕舞と云ふ有様ではいけません。其文明と云ふはあかるひ事で。闇のない事でありませす。開化と云ふはひらける事で。塞がりのなひ事でありませす。闇くては何事も出来ませす。然るに行燈をつけますと。云何に夜る夜中でも仕事が出来ませふ。其行燈が進みまゝして蠟燭となりまゝたらせふでせう。右の方では父親が帳合をし。左の方では母親が縫物をし。前では

が小學讀本をさらへるとか。向ふでは娘が毛糸の編物をするると云ふ様にあかりが大きければ大きくなるほど。多人數の者が仕事の出来るよふに。洋燈となり瓦斯燈となり。それからそれへすゝめはすゝむほど。働が大きくなる如く。今迄碌々何にもしないものが。殖産工業に力を盡し。益々國家の富む様に。子孫のさかへる様になりてくるのが有形の文明であります。又今迄は嶮岨なる山坂谷道で。中々五里か十里の間でも朝から晩まで。汗水流しての道中して。それも小供や老人になると。馬とか籠とかに乗らなければ往かれぬと云ふ有様で有りたに。其道を開拓致しまして。木の根をほりたり石を摧いたり。流には橋を架けて人力が通ふ様になりますと。一人の者を二人も三人もかゝりて。籠で運んだり馬で送ったり致したものが一人の人を一人の人で一日に廿里も三十里も造作なく。送り迎ひの

出来る様にあります。それが進で馬車となりて御覽。一個の箱に五人も十人も乗せまして馬が人を挽きませふ。又氣車となりませすれば一つの箱に五十人も百人も入れまして。今度は石炭が人をひきあるくと云ふやふ。それも五里や十里の事かと云へば。中々そんなぬるい事ではありません。百里の道中が一日はさまで。曉の六時に新橋を發車致しますれば。僅か十六七時間寐ころんで居るまに京都の御本山へ參られると云ふ有様でせう。それであるから是からの人は昔の人の十人前の働がなくては。立派な世渡はなりません。それに如何であります祖先の汗油で拵へた財産を滅茶苦茶にして。イヤ權理とか義務とか。イヤ硬派とか軟派とか。口では大きな事を云ひましても。己が一身を修むる事さへ出来ないと云ふ有様では。困りたる者ではありませんか。そんな事では有難ひ文明世界の良民とは申されま

すまひ。然るに淨土眞宗の教義を聽聞し。信決定の身の上となりませすれば。相九形の文明のみではありません。無形の文明たる仁義道德の本領を明かにし。曠味頑固の夢を覺し。不忠不孝の木の根を抜き。不信不義の岩を摧き。孝悌忠信の道普請に。明信佛智の瓦斯燈を點し。迷の娑婆から證の淨土。世間の氣車や蒸氣なら。轉覆沈没の恐れもありませうが。金剛不壞の弘誓の船。其船長は阿彌陀様。其機關手は觀音勢至。煩惱の風は強くとも。邪見の波は荒くとも。危なげのない甲鉄艦。十萬億土を一直線。其目覺しひ道中の仲間入とは。此上もない仕合もので。其味を知らずしてうかく暮す吾人を。あわれ不惑と思召し。此度と云ふ此度は。生々世々の百年目。此世と彼世と眞俗二諦。梅と櫻を両手に持せ。王法佛法二つ乍ら。御懸なる御化導が。今此一紙の領解文。之を開けは安心報謝師徳法

度の四本柱。文明開化の土俵入り。時機相應の花相撲。大音宣布と響きわたり。鬼も大蛇も組伏せられ。我慢我見の腰を折り。我身は悪しき徒ら者と。廣大難思の御手際を。仰きあけては南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

第三席

不思議な因縁によりまして。又ぞろ各々方と御法の御物語を致す事なるが。凡て世の中の事と申しますものは。何事に依らず事々物々因縁を待て初てあらわるゝものであります。併し折角の因縁がありて。親となり子となり。兄弟夫婦となりても。其因縁が和合しない時には。何の所詮も御座りません。音に所詮のないのみではありません。大なる不幸を醸す事になるかもはかられません。夫故に因縁の顯われたる以上は。御互に和合致して。共々に幸福を得たひもの

であります。其因と云ふは種の事で。いくら土藏の中に大豆や小豆の種が。俵に入れてありましても。寒暑風雨の縁に觸れないときには。何年経つても芽も出ず花も咲きません。設ひ因縁が熟して芽が出ましても。長雨とか早魃とか續くと云ふ様な事になります。其芽が腐りたり枯れたり致します。そこで五風十雨と云ふ様に。天地の氣候が和順しないといけません。御釋迦様が御說法あそばすにも丁度その如く。因と縁とか和合しませんと。一卷の御經も御説きあそばす事は出来ません。今御座の吾々も其通りて。往生の正因たる信心の種を。無明煩惱の心田に蒔つけて戴くには。時の縁と所の縁と同行の縁と善知識の縁と。一つの因に四つの縁か揃はねはいけません。然るに御互は其因縁は熟して居りますから。能く和合して結構な信心の芽を生ト。佛恩報謝の花を咲し。無上涅槃の實を結ぶ様

にいたさひではなりません。就きましては。此度は八代目の善知識蓮如上人の御化導なる。一紙の法語領解文の上を讚題に供へ。それを御取次に及ぶ御約束を致しました。この御法語は。一宗の道俗たる我人御互が。安心領解の手鏡として御化導なす下され。如何なる愚な田夫野人でも。出言と易く領解しやすさやう。御言葉は至りて浅近なる様にありますが。其義理の深遠なる事は。釋尊出世の本懐惠以眞實之利の法門を。開示あらせられたものであります。浄土眞宗の安心も起行も作業も。掟の趣きより孝貞忠信の教へに至るまで。一切の善法は悉くこの御法語に収まらされてあります。所謂褰衽裔必隨曳綱目皆張の道理で。綱には百千の目があります。も。綱を曳く時には總ての目が一時に張ります。着衣には袖ぢやの裾ぢやのと種々ありますが。衽を一寸つかまらて引上ると。袖も裾も

もつひて動く如く。此御教化の下で速に往生一定と。安心安堵の身になして戴き。正定不退の分人となりますれば。諸天善神の加護を蒙り。諸佛菩薩の擁護を受け。三惡道の道中は十萬億土の道中とかわり。惡魔外道の用達をしら徒ら者が。佛祖の御用を勤むる身の上となり。生ては皇國の良民と喚ばれ。死ては西方の往生を遂げ。命は無量壽證は無上涅槃。生ても死んでも兩手に花。現當二世の仕合を得る身にならるゝが。今此領解文聽聞の所詮。

第四席

偕て此領解文は。眞宗安心の骨髓を御示しあらせられたる。大切な御法語でありまして。例せば法然上人の一枚起請文の如き者であります。念佛往生の奥義を選擇集上下二卷の御聖教に書てありまして。愚な者には分り兼ねますから。安心の至極を手短に御化導が一

枚起請文であります。今も丁度其の如く。御當流の安心は。御文章の上に残る所なく。御教化なし下されても。取り誤りの事もあらんかど。他力安心の骨目を。纏か一紙の御法語に御示あらせられたる深重の思召を。幾重にも感戴致されひではなれません。御流を汲む人々は。朝夕佛祖の御前に於て。此領解文を拜讀せぬ者はありませんが。口に唱ふる人は多くありましても。心に得られた人は少なひものであります。昔も白樂天と申す人が。鳥窠禪師に佛法の奥義を尋ねられましたとき。諸惡莫作衆善奉行と答はられましたは。其位の事は三才の童子も知て居ると云ふて笑はれますと。禪師が云何にも三才の童子も之を知るは易し。八十の翁も之を行ふは難しと。申されました處が。流石は白樂天。これはくゝと感心致され。終に佛法の信者となられたと書て御座います。皆様ごふであります。既

に蓮師の御時代にも。若狭の二郎三郎と云ふ同行に對せられ。其方が領解は云何ぢやと。御尋ね遊ばされましたとき。もろくの雜修自力の心をふりすてと。領解文の通りを申しましたら。仰せに口と意と違ひはせぬかど。御意あらせられたとあります。御在世の同行ですら兎角口にはいへど。意に領解せぬ者があつたと見ゆまして。當場を云ひぬけんとする人のみなり。勿體なき次第なりと。御誠め遊されてあります。まして況や御座の我々は幼少の時より。領解文はおろか御和讃も御文章も習ひ覺て。毎朝毎晩御内佛に於て。殊勝に拜讀致されても。信心決定の上より如來聖人へ申上るのぞなくては。思召に契ひませぬ。所謂鸚鵡能言不離飛鳥とありまして。御承知の通り淺草の公園杯に。よく見世物に出て居ります。彼の鸚鵡と云ふ鳥は。お父さんといへと云へはお父さんと云ひ。お

母さんといへど云へはお母さんと云ふ眞似はしても。お父さんと云ふが父上の事やら。おッ母さんと云ふが母上の事やら知らずして。只人の口眞似ばかりするので。鳥の仲間には出られませぬ。今も丁度其通り。雜行雜修自力の心をふりすてゝとは云ひながら。雜行雜修が何やら。自力疑心がさふやう。離れ鹽梅も捨て工合も。筋道さへも得心せず。一心一向に疑ひなく。たのみ奉る一念の時。御助は一定往生は治定と。口では立派に云はるれども。心の底を詠めて見りや。若存若亡と二の足踏み。若もの事があつたなら云何なる事かと案トられ。思ひ煩ふ心中では。何程鮮かに唱へても。御開山の御門徒たる御仲間へは這られませぬ。祖師聖人御相傳一流の肝要は。只この信心ひとつにかぎれりとあるからは。御流を汲み奉つる所詮には。淨土參りの鑄形と定め。御勸めあらせらるゝ。此御化導に露い

さ、かも違はぬ様。御聽聞が肝要トや。總トて形と云ふ者は菊唐草ならは菊唐草。離れ模様ならは離れ模様。一つの形を拵へるもの故麥の粉を以て拵へても。寒晒の粉を以て拵へても。其體はかわれども模様はすべて同じ事トや。人の根機は千差萬別なれども。極樂參りの安心と云ふたら。我身の善と惡に目を掛す。たのむ佛は阿彌陀如來一佛と脇ひら眺めず。後生助け玉へと未來の大事を。往生の親様にうち任せ。助かる譯はなけれども。それを助けて下さるゝが阿彌陀佛かと。後生の埒の明た上から。御恩の稱名を喜ぶのが。信心決定の身の上やと。形を極めての御教化。五帖一部の御文章は。機に隨ての御化導ゆへ。或時は拜ます祕事に對せられ。或時は善知識たのみに對せられ。夫々の機に應トて多くは御勸めあそばしてあります。今此領解文の上は。機に拘ての御勸めではありません。假

令云何なる高僧碩徳の人であらふが。云何なる愚痴矇昧の者であらふが。秘事法門の族でも。高聲念佛の類でも。落付く處は斯くなくては。順次の往生は。覺束なひ事であるとの御化導であります。釋尊或時朝早ふ鷄足山と云ふ山中を。御通行の砌。尸伽羅越長者が眼をすりく起て。天と地とを拜し。それから東西南北の四方を拜して居を御覽あそばし。其方は奇特なる者であるが。併し天地四方の六方を拜する譯を知りて居るかど仰せられましたら。長者がいやもふ何も存トません。親父が常住此通りに拜みまして。私にも禮拜せよと申しました故。それで禮拜仕りますと申したれば。佛の仰せられるやう。それでは何の役にたぬ事ぢや。其方の親が姿ばかりで拜めよと云ふたではあるまい。此意を知りて勤めよと云ふたであらふと仰せられ。長者の爲に其わけをねんごろに説せられたが。六

方禮經と申す御經で。其六方禮と云ふ事は。六惡と云ふて六種の惡き事を除く法であります。先づ第一には酒を吞事を好むが惡い。第二には博奕を好む事が惡い。第三には早ふ寢て遅ふ起る事が惡い。第四には滅多に客を喚びたがる事が惡い。第五には殺生が惡い。第六に惡知識に交る事が惡い。と説せられてあります。ドーか皆様御互に四方天地は拜ますとも。斯様な事は成丈つゝらみたひ事でありませす。彼の尸伽羅越長者が。天地四方を拜しまして。其譯がわからぬいでは何の利益もありません。御互も其通りで。毎朝佛祖の御前に於て。此領解文を拜讀せられても。往生安堵の身となりて。御恩報謝の心より。述べ顯すので御座いませんと。勞而無功。何の所詮もない程に。篤と聽聞致されて。安心決得の上より唱へ上らるゝが。何より肝要。

さて此領解文御製作の思召を窺ひますれば。古來種々の説がありま
す。或は吉崎御逗留の砌。秘事法門を改めさせんが爲に。御造あそ
はされたもので。今迄安心の次第を心得違ひして居た者が回心した
時佛前で高聲に稱へた事ぢやとも申傳へます。成程越前の國に於て
弘まる處の秘事法門と云ふ事は御文の上にもあります。又吉崎御逗
留中の御文章では。三帖目の毎年不闕の御文と。今月廿八日の御文
と。四帖目の八箇條の御文。此等に改悔懺悔と申す御言葉が出てあ
りますから。吉崎御逗留の砌に御製作遊ばされた事と見ゆます。或
は河内國出口の光善寺に御眞筆が残りてありまして。如秀禪尼へ下
されたとも傳へます。して見ますれば豫て造り置せられたものを。
如秀禪尼へ進せられたものかとも思はれます。兎に角どちらに致し

まして。學識徳望のある人々を相手の御教化ではなく。如秀禪尼
の如き女性の人々や御座の我人へ。安心の手鏡として残り置せられ
たる。大切な御法語でありますから。一通りの事と心得られては残
り多ひ事トや。また往生の大事に夜の明ぬ者の爲には。心安く信せ
らるゝ様に御示あらせられ。又愚な心中に會得しながら。其會得し
たる他力安心の味ひをば。述べ兼て居る者へは。其方が領解はかふ
であらふと云ふて。聞して下さるゝ思召が此領解文で。諭へて申し
ますれば。稚子供が菓子や蜜柑を見ると。心一盃に欲いと思ひまし
ても其欲ひ心を得申しませぬ故。母親が坊よ是がほしいかと問ひま
すれば。あいと答へます故。之が欲くは頂戴と云へと教ふる如く。
宿善到來の時節が純熟し。善知識の御化導が明かに聞へ。本願の御
手元が信せられ。往生の大事に疑ひ晴れ。喜ぶ心底胸の内を解剖あ

らせられ。雜行すて、彌陀をたのみ。雜修を離れ本願にすがり自力
 心に目をかけず。たのみ歸命の一念に。決定往生疑ひなく。天は地
 となり地は天となり。水で世界は焼けても。此事一つは間違な
 く御助ありつる事の嬉しやと。喜ぶ計りて御座りますと。子になり
 かはる母親の慈愛の誠があらはれて。安心報謝師徳法度。何から何
 まで御化導にあづかる事の仕合を。喜ばいではなりません。實語記
 の上で伺ひますれば。蓮如上人山科に於かせられ。報恩講七晝夜の
 間毎日御迢夜が濟みますと。皆下向したあとで。五人十人乃至三十
 八宛。強信な同行計が残りまして。夜分になると僧俗共に交るく
 一人く。蓮如上人の御前に於て。改悔を申上た事と見えます。只
 今御本山に於きましても。御正忌の間は。毎日初夜の勤行に引續き
 改悔批判の御化導があります。これと云ふも蓮如上人の御時代より

御定めあそばしての御法則であります。斯の如く何から何まで御意
 を盡させられ。浄土眞宗を御再興なして下されたればこそ。四百年後
 の今日只今。一天四海に比類なき御繁昌に渡らせられ。日本帝國の
 御威光と共に。海外諸國の人々迄。歸依信仰する事に相成ますと
 云ふは。誠に芽出度事の極まりであります。

第六席

蓮如上人御在世の砌。越前地方には。御安心の間違ひが色々あつた
 と見ゆまして。先づ荒目な處では。雜行たのみとか雜修たのみとか
 自力たのみとか。それにも色々枝葉が分れ。心得誤つて居た族が澤
 山御座いましたと見ゆまして。もろくのと御意あらせられてあり
 ます。それから不拜秘事とか稱名正因とか。十劫秘事とか善知識た
 のみとか。七通り程異安心がありますのを。それく御化導あらせ

られ。改悔懺悔と心得惑へる過ちを改め悔ひ。御正意の御安心にも
とつかして下さるゝ。深い思召のある事で。自ら此領解文を拜讀致
しまして。次第相承の善知識の淺からざる御勸化の御恩とある。御
言葉を戴きますと。善知識たのみの誤りが知れます。此上の稱名は
御恩報謝と存ト喜び申候とあるを伺ふては。やれ々今迄稱へた力
をあてにした事の勿體なやと誤り入り。往生の正因は信心一つにあ
る事が。明かになります。又佛祖の御前に跪き雜行自力の瘦せ我慢
を誤り。一心に阿彌陀如來と往生の大事を彼尊にまかせ。露いさ
ゝかも計らひなき。自身の領解を言葉に顯はし。回心懺悔して諸人
の耳に聞かしむる時は。此回心懺悔をさしても。實にもと思ひて自
ら不拜秘事の惑も去り。一味の領解にもとづく人も出來ます。たの
み奉る一念の時。往生は一定御助は治定と。聽聞致しましてはさふ

して十劫の昔に我往生を成就し玉ひし事を。忘れず疑はざるが
信心ちやと心得たは。眞實の信心とはいはれぬと云ふ事が。判然と
知れて参ります。かゝる深重の思召を。纒か一紙の御法語に巻て疊
での御勸めが。此領解文です。何と恐入つた事ではありませんか。
實に生れ難い人界に生を受け。殊に文明維新の御世に在りながら。
徒らに名利人我の事のみ貪着し。轉迷開悟の大法を聽聞せず。う
かく暮らしては。萬物の靈長と云はるゝ所詮はありません。云
何に金殿玉樓に寢休をし。綾羅金繡を身に纏ひ。山海の珍味を口に
味ひ。美人ぞろひの喜見城。何不足なき果報目出度身の上と申まじ
ても。それは五十年乃至百年の間。それも老少不定と聞ときは。今
をも知れぬ果敢なひ娑婆であります。一朝顔を何はかなと思ふらん
人をも花はさこそ見るらめ。よく案トて見れば案トて見る程

風葉の身。草露の命。風の前の燈火草の上に置く露とひとしく。朝顔よりもひろひのが我人御互の身の上なれば。急ぎても急ぐべきは後生の大事と。驚きの念慮を起し。信心決定の身となられるが肝要

第七 席

扱て題號の上に就て御取次を致しますれば。此御法語を古來改悔文とも。又は領解文とも申します。凡て題は一部の總標と申まして。假名手本忠臣藏と云へば。誰でも鹽谷判官の家來には四十七人の忠臣義士があつて。主人の讎たる高師直を斃し。腹十文字に切りさばさ。天晴美名を天下に轟かしましたは。譬へは釋尊因位御修行の砌雪山童子でありしとき。答なき御身が衆生濟度の爲なればこそ。半偈の爲に御身を羅刹に與へさせられ。御苦勞なと下された。其涅槃經の中にある四句の偈文の御意を。弘法大師が和らけさせられ。い

ろは四十七文字に御作りあそばした文字の數と意とに似て居る處より假名本手とし。其四十七人の義士の大將世の忠臣義士の鏡とも云はる。は。内藏之助であると云ふ事になります。皆様方も御承知の國姓翁といふ芝居の如きも同ト事也。彼の國姓翁と云ふは。唐土明の代の鄭芝龍と申す人が。我日本平戸の田川氏の娘を女房にしまし。出來ましたが鄭成功であります。其姓は朱氏にて。彼の明朝の天子の姓も朱氏でありますから。國の主の苗字の翁と云ふ事也。國姓翁と云へば鄭成功の事を。芝居に作りたものと云ふ事が分ります。此鄭成功と申す人は。明朝の爲に今の清朝に敵對致しまして。忠義の名を後世に残しました。是と云ふも母親たる田川氏が。日本人の特有たる忠君愛國の教育を受けられて人となられた。其家庭教育の結果であると云ふ事が。今の世までもあらはれて居ります。既に私

も先年臺灣に参りましたとき。樺山將軍に隨行致しまして。鄭成功の廟へも参詣致しまして。二百年前の事を追慕致した事であります。今の清朝の爲には敵となりた鄭成功であるが。忠義の眞心と云ふものは恐ろしひもので御座います。清朝より王者の禮を以て大切に祭られてあります。是に付ても家庭教育の必要なる事を御承知になりまして。御婦人方は別して眞俗二諦の教義を厚く御信心に相なり。忠臣孝子の出来ませう。御子さん方の教育が肝要であります。時に題號にも佛自立の題と。經家の題と二種がありまして。たとへば金剛般若波羅密多とか。觀極樂世界觀世音菩薩杯と云ふ様なは。御釋迦様が自身に御付なされた題號。又佛涅槃の後に羅漢方が寄集りて。御經を結集なされたとき御付なされたを經家の立題と申します。此御法語の御眞筆には改悔とも領解とも題號は御座りません。後に

至りて或は改悔文とも領解文とも名を付たものであります。先づ改悔文と名けますときは。御文章にも開山聖人御勸化の趣き。近年諸國に於て種々不同なりと御歎きあそばす如く。蓮如上人御出世迄は。諸國の御門末に種々不正義の僻法門を申す者が。多くありましたを。悉く摧き破らせられて。中興復古と一宗を昔の通りに興隆あらせられ。遂に御繁昌になりました。初め大谷の御堂破却にあわせられ。夫より堅田大津の間を御漂流あそばし。終に三井寺の南別所邊より忍び出させられ越前吉崎に越らせられ。加賀能登越中濃出羽奥州七ヶ國より。道俗男女の参詣が群集致しましたのが。中興の最初で。彼の吉崎御逗留の間に。先づ越前に弘まる處の秘事法門の不拜秘事や。十劫沙汰の誤を退治なした下され。又は善知識たのみを御破りあそばす等。容易ならざる御化導の顯はれで。何れも御正

意の安心を美しく聽聞し。今迄の心得違ひをあやまり。回心懺悔と
 て申上ましても。田舎者の愚な拙なひものばかりで。御正意の安心
 をば決定しながら。碌々述ぶる事が出来な故。いよく心底より
 回心懺悔して御正意を聽聞し改悔の趣を申上るに付て。過ちのなき
 やふに申陳るなれば。此通りぢや程にと仰せられて。此御法語を御
 造りあそばしたるもの故に。改悔文と名け奉る事と窺ひますれば。骨
 身もくたくる程ありがたひ御慈悲であります。改悔と云ふも懺悔と
 云ふも回心と云ふも其言葉はかわりましても一つ事であります。改
 悔とはあらためくやむと云ふ事で。御式文には遂令改悔之族同
 稻麻竹葦ともありまして。天竺では懺摩と云ひ。唐土では悔過。
 今改悔と云ふが其事で。過を悔むと云ふ事で。過を悔むと云ふは過
 ちした時に悔む機にならねば。改めると云ふ事は御座いません。悔

むどきに改めると云事があるのであります。夫に付て他宗と當流と
 の違ひがありまして。他宗の懺悔は三品の懺悔と申まして。血の汗
 血の涙を流して。身に覺ゆて居る程の悪事を。言葉に顯はして改め
 る事を懺悔と申します。御當流のは夫とは違ひまして。惡業煩惱は
 初めから。御承知の阿彌陀如來。こんな事しなしての。こふ云ひま
 してのといわなidem。元より貪瞋邪偽奸詐百端惡ひ事はみな御合
 點の上。御受取なと下さるゝ程に。鶴の足は長くとも切るには及ば
 ず。鴈の足は短くともつぐには及ばず。其身其儘の御助け故に。惡
 業を懺悔するにはをよびませぬ。こゝを歎異抄の中に。一向專修の
 人に於ては。回心と云ふ事只一度あるべし。其回心とは日頃本願他
 力の眞宗を知らざる人。彌陀の智慧をたまわりて。日頃の心にては
 往生かなふべからずと思ひて。もとの心をひきかへて。本願をたの

みまひらするをこそ。回心とは申し候へ」と仰せられて。日頃の心とは悪業煩惱のよふなれども。さふでは御座いません。他力往生の由れを知らぬ。雜行雜修自力の根性を以て。此功德を佛にならふ。これを往生と思ふた自力雜行の元の心を引替へ。一心に阿彌陀如來今度の一大事の後生御助け候へど。たのむ心を改悔とも云ひ。回心とも申します。かゝる難有ことを今まで信ト奉らざる事のあさましさよど。如來をたのむ思ひが改悔であります。蓮白玉と云ふ人は。五十の年になつて四十九年の非を知りたど申しますが。御座の我々は無始曠劫の昔より迷ひ吟行ふた久遠劫來の非を知り。自力の心をふりすて、御助け候へど。心に信ト奉る思ひを改悔と仰せられた程に。知らぬ昔は是非もないが。ちゞめくた此御教化のある上は。何れも根性を相改め。本願を深くたのまれいでは。所謂入水垢不落

之風情とも。寶の山に入りながら。手を空うしてかへらんのことならんものかとも。御歎きあらせられてある。

第八席

文如宗主の奥書に。此御法語を領解文と御名けあらせられてあります。其時には領は領受解は解了の義にして。善知識の教の儘を領受し。教のまゝを解了する事也。即ち信心の異名であります。法華文句の上に。其聞く處を領し其解する處を述ふとある。之を妙樂大師は解して領は外佛語を領し解は内佛意を受くとあります。そこで正信偈の上には行者正受金剛心と仰せられて。正しく金剛の心を受るとは。阿彌陀如來から貰ふた事でありませす。何が後生やら何が菩提やら。地獄と聞ても恐らうもなく。極樂と聞ても樂らうもなく。出てゆく未來が苦にもならず。うかく暮す愚な者が。往生は一定御助

は治定と。富士の御山に腰を掛け。三保の松原を詠むる様に緩くりと落付たのが。我持料の根性ではありますまい。一念歸命の端的に衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心と。凡夫の惡しき心にては助からず。如來のよき御心にて往生するなりと合點をしたのが。阿彌陀如來御回向の貰ひ物ちやと云ふ事を。領解文と名けたものであります。いかにもそう云ふ御教化は。常に聽聞致しますが。阿彌陀如來の御心を貰ふと云ふ事は。さふも合點の行ぬ事と思はれる人もありません。そこが我等凡夫の淺墓な境界で。はかるにはかられぬ。阿彌陀如來の自在神力の妙用と申すものであります。昔唐に扁鵲と云ふ名醫がありました。其所に或日幸候と云ふ男が來て。療治をたのみますには。私はちと生れ付て氣が弱ふ御座ります。少し人が大きな聲をしてもびつくりし。多人數の中へ參りますと。脇の下から冷たい

汗が出ます。こんな事では男子の仲間入をした所詮がありません。ら。ドーか氣の丈夫になります。御藥を願ひたふ存トますと云ふて居る處へ。又一人の人が參りまして。先生私は齊衛と申す。性得横着者でして。假初にも腹を立てまして。ツイ刀劍を抜ひたり喧嘩をしかけたり。そんなひとを見ましても二束三文とも思ひませぬ。こんな事では一生を全ふする事は覺束ないと存トます。何卒氣の弱くなる御療治を願ひますと云ふ。そこで扁鵲がそれは二人をこねませたら結構な上人間が。二人出來ると云はれますと。齊衛はこれは面白と莞爾く笑ひ。幸候は恐れてべそく泣き出したそふであります。そこで扁鵲は夫々藥を調合し。魔睡劑を吞し兩人の胸を斷割り。齊衛が膽を幸候の胸の内へ。幸候が膽を齊衛が胸の内へ入れかへ。疵口を縫ひ藥を塗り氣付を吞した處が。兩人ながらさよろりと起き上

り。幸候は齊衛の家に歸り。齊衛は幸候の家に歸りたとあります。凡夫でさうも上手な醫者は膽と膽とを入替るに。況や阿彌陀如來の大醫王は。難化の三機難治の三病とて。恐ろしさ無明煩惱の性惡るの御互は。助かる事のならぬ故。金剛不壞の信心を譲り與へ。早かれ遅かれ一度は信せさせずは。佛にはなるまい。稱へさせずは證は開くまい。往生させずは正覺は取るまいの御念力が届かせられ。一念歸命の當體に迷ひに惑ふ惡心を。極樂參りの信心に入替て下されたのは。親でも子でも叶はぬ事。それを仕替へて下さるゝが阿彌陀如來。入れ替て貰ふた證據には。今まで危おんて居た極樂參り。今迄疑ふて居た本願の御手元。未來の一大事に氣の弱かつた此凡夫がたのむ歸命の一念にたといひ罪業は深重なりとも。必ず彌陀如來はすくひまじますべしと。恐れ氣もなくにくく喜ぶ身の上となり。息

の切れ場には。今迄住み馴れた齊衛が家を取り違へて。幸候が家に歸るか如く。横截五惡趣々々自然閉と。今まで住み馴れた迷の我家へ歸らずに。寂靜無爲の目の覺た。紫金蓮臺に座を占めて。我身ながら合點の行ぬ。無上涅槃の證を開くに疑のない仕合ものと。召なして戴く味ひが。則ち領解の出來た身の上と申すものであります。さて此御法語を強ちに改悔文といはねばならぬ。イヤ領解文と稱へねばならぬと。争ふ事では御座いません。法の深信より云は領解文。機の深信より云へは改悔文。孰れにしても差支へはありません。初めもろくの雜行雜修自力の心をふりすてと申す。御言葉から伺ふときは。改悔文と申す方にあたります。又一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生。御助け候へとある邊からは。領解文と稱する方がよく叶ふて居ります。併し大派の方では多く改悔文と稱し

本派の方では領解文と申しますのが。自ら御家格になりて居ります
 兎に角御座の我等へ對せられ。箸を含めてかまして吞ます様。云
 何を愚な身の上にても聽聞の出來ます御教化が。此御法語でありま
 す。之が別ち淨土眞宗一宗の憲法で。其國の人民としては。其國の
 憲法にしたがわねばならぬ如く。設ひ家は禪宗でも葬儀は天台で執
 行ふても。後生の大事に驚きの念慮を起し。信心決定の行者となり
 極樂往生に疑ひなく。現當二世の幸福を全ふする身の上となられる
 には。此領解文の上に御示しあらせられてある。安心報謝師徳法度
 の憲法を守られいでは。芽出度御同行とは申されませぬ。又必ず守
 られる身となられるが信決定のこゝろであります。他の聖道諸宗の
 教とは違ひまして。信心の其儘が世にある間は。仁義ともなり忠孝
 ともなり。處世の業務を勵むのが。直に佛恩報謝にそなはると云ふ

今古獨歩の妙教が眞俗二諦の御宗旨であります。法如上人の御法語
 にも。苦みは欲より出で、身をなやまし。名聞は人我より出で、心
 を費す。身の分限を顧みれば人に恨みなく。足る事を知るときは名
 利を貪る事なし。只願ひても求めたきは法の縁なり。慕ふても尋ね
 べきはよき同行なり。朝に結ぶ露を見ては仇し野のもろさを思ひ。
 夕べに立つ煙につけても。鳥邊野の果敢なき事をさとりて。心に
 くべきは法のいとなみなり。衣食住の三つは念佛の助業なれば。朝
 夕の家業を心にかくるとも。佛祖の御恩を忘れずは。家業も報佛恩
 の助けとなるべし。たとへ明暮法門ばかりを所作とするとも。自信
 教人信の思ひなく。名利の爲に法を行ふ時は。佛法もまた渡世とな
 るべし。故に信は大悲に縋り。報謝は行者の懇念を勵むべしと。御
 意あらせられてあります如く。信心領解の上からは。何事も佛祖の

御用と心得。念佛もろとも此手を使ひ此足を使ひ。見るも聞くも往生の親様と諸共にさして戴く身とされますれば。邪路に落入る愁もなく。邪見に墮する恐もなく。明かなる道行をして。芽出度一生を終り。光明から光明づたひの仕合せものは。念佛行者の身の上である。

第九席

却説御互に萬物の靈長たる。我人の身に於て宗教の必要と云ふ事は今更改めて御話を致さいでも。世界の輿論となりて居りますが。其宗教を撰ぶと云ふ事は誠に大切な事。先第一に末代今時の我々が造作なく轉迷開悟の出来る法は。孰れの教であるか。又此世ながらへの間。殖産興業總ての世渡に。爲になるか障りになるかと云ふ事も。考へねばなりません。又日本と云ふ國の爲め。天皇陛下の御心

に叶ひ。四千萬の人民が一致結合するには。云何なる宗教が便利であるか。祖先に對してはどふ云ふものか。妻子に取つては云何であるかと云ふを。よく吟味して信するが肝要であります。蓮如上人の御形見たる今此領解文の上を。能く聽聞して見ますれば。安心報謝師徳法度と。四段に分けて御化導なして下されてあります。其安心と云ふはこうであります「外に眼はふらす雲井に揚雲雀」。一心一向に彌陀をたのみ歸命の端的に。往生の大事は業事成辨と明かにさまるのであります。其味はこうであります。「開くときこの實をむすぶ蓮の花」。信心の花の咲く當体に。正定不退の實を結ぶのであります。斯の如く決定しての上には。寐ても覺ても報謝の稱名を相續し。世渡の出来る味ひのある處が。所謂「散るまでも香はうつろはず花柚哉」。自然と多念に及ぶ道理なりとも。一期の間は此光明の

内にすむ身なりとも。御意あらせられてありますれば。煩惱妄念の中からも。やれく嬉しやくくと。「五月雨のしげさが中に咲く葛蒲」と。曇りがちな胸の中から。喜びのあらわれる働さが。則ち信心の内に具つて居るのであります。「玉の軒も賤がふせ家も月今宵」。一味平等の御慈悲が頂かれて見れば。祖師善知識の御育にあづかりたればこそ。海山つもる御恩の程が。我身にしみとみと喜ばるゝ様になるので。「なかくに御手間かゝりや菊の花」種々に善巧方便の御手回しがなくては。迎も之れ程の大事に安心の夜の明け様はありません。然るに宿因深厚のあらわれ。善知識の御勸化が耳に入り。安んじ往生の素懐を得る身の上となられた所詮に。流星に念佛の行者は違ふた者。二諦相資の御宗旨は肝心など。世の中の人にも讃められ。我身の上にも喜ばれ仁義道德が守らるゝ様になれるのが。信

決定の仕合であります。「はなつのは仁あり義ありぬくめ鳥」人の一生は重荷を負ふて。遠き道を行が如くともありまして。永い道中には雨の爲に困る事もありませう。宿が魔末で寐られぬ事もありませう。躓て足を痛めた事も気分が勝れぬ事もある如く。煩惱具足の凡夫同士が寄り集りての事であるから。難儀な事も苦い事も随分ある筈の事。そこが「重くとも折るゝまでもて雪の竹」其度毎に御慈悲に立ち戻り。堪忍の出来るが信心のはたらきである。それが其儘光明攝取の顯はれである。斯様な仕合の身となられ。一家一族の和合が。遂に天下國家に及ぶ様になりませうぞなら。爾臣民父母に孝に兄弟に友に。夫婦相和し。朋友相信し。恭儉已を持ち。博愛衆に及ぼしと。御意あらせられたる。教育の勅語にも叶ふ道理であるから此御法義は獨り眞宗の門徒のみ聽聞するものと思はず。因縁を求め

他の人を誘引せらるゝやふ。心掛らるゝが何より肝要。

第十席

古來この領解文の科段を。安心報謝師徳法度と四段に分て辨トます
が。全体御法語は善知識の御化導に預り。自身くの聽聞前を佛祖
の御前に於て。出言致しますために御製作あらせられたものである
から。左様に科段を分て六ヶ敷御話をするには及ぬ事のやふに思は
るゝ方もありませふが。蓮如上人が我々の聽聞前を汲取らせられ。
御勸化あそばされた深ひ思召を窺ひますには。科段を分けて聽聞致
すと。又一段の味ひが出ます。抑も蓮如上人。常の御教化振りが。
初に安心決定の相。後に安心相續の相と。斯く分れますのが。いつ
もの御さまりです。末代無智の御文章で聽聞致しますれば。末代無
智の在家止住と云ふより。設い罪業は深重なりとも。必ず彌陀如來

はすくひましますべし。とある迄が安心決定の相。此の如く決定し
ての上には。ねてもさめても命のあらん限りは。稱名念佛すべきも
のなりとあるが。安心相續の相であります。音に末代無智の御文の
みでは御座いせん。何れの御文でも。初に安心決定の相を懇に述
べさせられて。次にはいつでも。この上にはなほ後生の助からんこ
とのうれしさありがたさを思はゞ。只南無阿彌陀佛くと稱ふべき
ものなりとも。又は此上にはなをくたふとく思ひ奉つらん心の
起らん時は。南無阿彌陀佛くと時をもいわす處をよきはす念佛
申せども。其上の稱名念佛は。如來わが往生を定め玉ひし。御恩報
盡の念佛と心得よとも。御意あらせられてあります。今此領解文の
上て伺ひますれば。もろくの難行雜信自力の心をふりすてゝ。一
心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御助け候へとたのみ申し

て候とあるが。安心決定の相。たのむ一念のとき往生は一定御助は
 治定と存ト。此上の稱名は御恩報謝と存ト喜び申候等とあるは。安
 心相續のすがた。其安心相續の上に就て。報謝の稱名も顯はれ師徳
 を尊む思ひも顯はれ。掟に違背せぬ心も顯はれるのであるから。安
 心相續の中から三段に分かれるものと心得ねばなりません。斯様に
 御話をすると。何か講釋のやうに思はれる方もありません。豆腐
 や茄子の田樂は串は喰べられぬけれども。串がなければ味噌を付て
 焼九豆腐や茄子の甘味を出し様がありません。今も夫と同ト事で。
 安心決定ぢやの安心相續ぢやのと科段を分け。骨こひ串に貫してみ
 ますると。我々銘々が胸の内に和かな。ごふしてみてもこうしてみ
 ても。私は極樂へ参らせて下さるゝが。嬉うござりますると云ふ。
 快い信心の味ひが顯はれて参ります。蓮師が之れ迄は安心。之れか

らは相續と。斯様に御分け遊さるゝに付て。安心の御教化と報謝の
 御勧めとは雪と炭との如く。何時までも別物ぢやと。一概に心得ら
 るゝと。蓮師の思召も顯はれず。又我身の領解も判然と夜が明ぬ事
 になります。そこでこれからは報謝相續ぢやと分けて御見せあそば
 さるゝは。一念歸命の安心を明かに御手渡し遊さるゝ思召で。報謝
 相續を勧めて置せられたは。安心決定を明かに落付せふ爲の御教化
 であります。安心決定とは無始以來つくりと造る惡業煩惱。其惡業
 煩惱に若も姿形があつて御覽ごふでしやう。置所もなき罪咎でしや
 う。其罪咎をたのむ歸命の一念に消し滅して。凡夫の往生を如來の
 方より御定めなされて下さるゝ。何に當て事もない徒ら者が。未來
 の大事は間違なく。浄土参りの身の上と。心の内にさつはりと埒の
 明たが。即ち安心決定であります。己れの機様に取付て。これなら

善らふか。それでは悪かるふかと。自力の計ひに止る間は。どふしても報謝相續の喜びが顯はれやう筈はありませぬ。然るに聞其名號信心歡喜と説せられて。宿善到來の其時に善知識の御化導に預り。本願生起本末を聞て見りや一切恐懼爲作大安と仰せられて。彌陀の本願は御自身の爲に起させられたではなく。苦み痛む迷ひの凡夫に大安樂を與へんとて。五劫永劫の永の年月。御苦勞なれ下されて。御成就なつたが南無阿彌陀佛。此名號の謂れに由て。落るにさまりた私が。助かる事に間違はひと。信せられたであらふぞなら。信心歡喜と云ふは。即ち信心定まりぬれば。淨土の往生は疑ひなく思ふて喜ふ心なり。一念歸命の其時より。知らず覺せず任運無作。善惡苦樂が御縁となり。報謝相續の出来るのが。取も直さず安心決定の證據なりと。聽聞が肝要。

第拾壹席

さて其安心決定の相と。安心相續との水際を除へて申しますれば。惡戯盛りの小供に頭を剃てやろふと云へは。否ぢやと云ふて逃まはります。そこで賃をやるほかに剃らせよと喚かけられ。賃にはたされて剃りかけます。處が痛いもんであるから。たぐを云ひます。なせこんな聞分のない子であるふかと。叱られるものであるから。已むを得ずしく泣いて剃らせませぬ。扱て剃て仕舞てそれ見よ御頭を撫て御覽。奇麗な事美しい事と譽られて。御頭に手を舉げ撫て見ます。いかな小供も莞爾くと笑ひます。今迄の泣顔が笑顔に變るは。奇麗になつて譽めらるゝと。安心の出來た顯はれせやう。母親がサーちゃん御隣の伯母さんに見せておいそといへは。嬉しがつて飛で参ります。今安心決定の姿が丁度其通りで。一筋繩では手

に合はぬ悪人凡夫の身の上やもの。後生も菩提もあらはこそ。朝
 から晩まで八億四千念。云ふこと爲る事思ふ事。おしいが止めはは
 じひが起り。悪いと可愛が變く。怨で見たり慕ふて見たり。言ふ
 も語るも地獄の業。泣も笑ふも悪趣の因。悪いと承知はしながらも
 悪い心が退かず。善いと合點はしながらも其善い事に進みはせず。
 親にも子にも女房にも。連れ添ふ夫の手前にも。云ふにいはれず。
 明すにあかさされぬ。我身で我身に意見して見れば見る程耻かしい。
 罪業深重の徒らものと。我機の分が知られたなら。出て行く未來が
 案下られ。御法の席にも出る筈ぢやに。隣り近所の人々が参り下向
 の道すがら。徒者と慙ろふたり。仕合ものと喜んたり。問ひつ答へ
 つする状を見ては嘲り聞ては笑い。謗法罪を犯す身を御覽あそばす
 親様の御胸の中は云何ぞしやう「慈悲の眼にくしと思ふものはな

し。罪ある身こそなほあはれなれ」それ程邪見のものなりやこそ。
 三世の諸佛の慈悲に洩れ。九方の浄土に見すてられ。生死くど果
 てしなく。無明行識名色と十二因縁の車の輪は。始もなければ終も
 なく。苦より苦に入り冥より冥に入る。我等衆生をすくわんとて。
 幾世多劫の其間積功累徳のあらわれで。正覺の阿彌陀となり玉ひ。
 たのみをかけし人はみな。往生必ず定りぬ。待てく待ちかねて。
 恨みに思ふとおつしやつても。はいと返事をせぬ故に妻子となりて
 死を見せ。果敢ない娑婆ぢやと合點させ。機嫌とりたり瞋たり。善
 巧方便の御手回で。自力疑心の髪を剃り。雜行雜修の垢を落し。明
 信佛智と速かに無明の闇が晴て見りや。善根もいらす功德も入らす
 妄念妄執の心の起るをも止めて來いとの御意でもなく。此身此儘の
 丸助けと。剃た頭を撫て見て喜ぶ子供と同様。信火行煙とあるか

らは。心の中に信心の明い光明の火があれば。仕合者は私と稱へ顯はす相續の煙は口から出る筈。サ一御同行此味が知れますか。こゝでありますぞ。蓮師が報謝相續と分けての御化導はこゝでありますぞ。喜ばにやならぬと仰しやる御勸めぢやとは思はれまいぞ。喜べるのが安心決定の出来た證據ぢやと。御意あらせられたのである。子供に頭を剃てやるのは。嬉しがらそふとて剃てはやらぬ。頭の穢が取てやりたい計りで剃てはやれども。剃て見れば自ら嬉むがる如く。今報謝相續の御勸化も喜ばそふが目的ではない。迷の根が抜ひて取せたい。自力疑心の髪が剃てやりたいと。思召からの御慈悲であります。自力疑心の髪さへそれて仕舞へば。思はず知らずやれ嬉しやとひとりでに。御恩報謝の稱名は相續せらるゝ事である。

第拾貳席

もろくのの雜行雜修自力の心をふりすてゝ等。上來科段を辨ト終りましたから。是より入文解釋と申して領解文の御文面に就て。辨せねばなりません。先づ初にもろくのの雜行雜修自力の心をふりすてゝ。一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生。御助け候へとののみ申して候。之れ丈が安心の戴さぶりを御示あらせられたもので。此中が又二節に分れまして。初に所廢後に所立。所廢とは捨物所立とは貰ひもの。其捨物は雜行雜修自力の心。其貰ひものは他力回向の御信心。そんな愚な凡夫でも取誤りのない様にと。御丁寧なる御教化トや。其中先づ所廢の一段を御取次に及びまするが。凡て經論釋の上を伺ひますときは。釋名出體と云ふ事がありまして。釋名と云ふは名を釋する事でありませす。出體と云ふは物柄を出して見せる事でありませす。此二つがなければ分りかねます。今は聞へ易

いやふに出體を先にし。釋名を後に述べる事としませふ。左様でな
いと皆様方が物柄を御存トでありませんから。名けた譯が知れませ
ん。喩へは鉢と云へは丸いもの。箱と云へは角なもの。其體を皆
様が御存トであるから名も能く分りまするが。雜行と云ふものが如
何様のものやら。雜修と云ふものが何の事やら分りませいで。雜
行と云ふ譯も雜修と名ける譯も。分るものでは御座いませんから。
先づ其體を出して御目にかけます。扱て雜行の體をしらべて見ます
ると。無量無邊なれども。暫く五種の正行に對して五種の雜行と云
ふ事があります。五種の正行と云ふは。一には讀誦正行。二には禮
拜正行。三には觀察正行。四には稱名正行。五には讚嘆供養正行で
あります。初に讀誦正行と云ふは淨土の三部經を讀むのであります
此を除て外の般若心經とか。觀音經とか云ふ様な。大小乘顯密の諸

經を讀で極樂往生を願求するを。讀誦雜行と申します。二には禮拜
正行と云ふは阿彌陀如來を禮拜するのであります。其他一切の佛菩
薩を禮拜するを。禮拜雜行と申します。三には觀察正行と云ふは。
阿彌陀如來の極樂の依正二報の莊嚴を心に浮べて見る事であります
自餘の諸佛菩薩の御淨土を觀察するを。觀察雜行と申します。四に
は稱名正行と云ふは。阿彌陀如來の御名を稱する事であります。此
外は觀音の御名にもせよ。不動の御名にもせよ。總て之を稱名雜行
と申します。五に讚嘆供養正行と云ふは。阿彌陀様を讚嘆し阿彌陀
様を供養する事として。餘の佛菩薩を讚嘆し餘の佛菩薩を供養する
を。總て讚嘆供養雜行と申します。何故に阿彌陀如來に就くと正行
と云はれ。諸佛に就くと雜行と名が付くぞと云ふ處で。今の釋名が
入用であります。名の譯を是から心得るので。御經を讀も御姿を拜

ひも。心に思ふも口に唱ふるも。譽め奉るも御供養申すも。彌陀如
 來一體に就けは正行と云はれ。諸佛や菩薩に就と雜行と名かついて
 千中無一とて千人の中で一人も參られぬとあるからは。垢ぬけのす
 る迄此處はよくく吟誦せねはならぬ事でありませす。なせ雜行と云
 はるゝぞと云ふに。善導大師の御言葉に。雖可回向得生。衆名ニ
 疎雜之行。又名ニ雜毒之善とありて。雜の字に疎雜の義と。雜毒の義
 と。二義があるので。皆様方は雜行と云へは。只現世祈りの事の樣
 に御考でしやうが。今此善導の御意は現世祈りのみではありません
 後生を願ふ機類がさまざまあつて。法華を讀て此力で極樂へ參らせ
 て貰ひたいとか。戒法を持て往生が遂たいとか。色々の人がありま
 す。成程鎮西杯ではそれで往生が出來ると許す事でありませす。固よ
 り阿彌陀様の御願の中。十九の願は臨終現前の願と申しませして。大

小乘の經典はおろか人天世善の功德。土を粉ねて佛を造り。一碗の
 飯を乞食に與ふる功德まで。淨土へ回向して往生せんと願ふ者があ
 るなれば。生れさせやうとある御誓であります。夫故鎮西では諸行
 往生と云ふ者を立てませすが。御宗旨にはそれを捨てよと仰しやるの
 で。如何にも十九の願に生れさせやうとありませして。それは化土
 の往生の事で。方便の願と云ふて阿彌陀様の眞實の願ではありませ
 ん。そこで雜と云ふか眞實報土へ生れられぬ譯を。云ひ顯はした名
 になります。生れられぬ譯は疎雜の義と雜毒の義と。此二つの失で
 ありますから。雜行の人は千中無一とさらわるゝのであります。先
 づ初に疎雜と云ふは疎はうとひと云ふ文字で。親に對する言であり
 ませす。そこで法然様は親疎對と御意あらせられます。念佛は阿彌陀
 様に親ひ行である。諸行は阿彌陀様に疎ひ行であると申す意で。雜

行と名けたものであります。申す迄もなく阿彌陀様の事を説てある御經を讀で阿彌陀様を禮拜し。阿彌陀様の御名を稱へてそれを阿彌陀様に指向るなら親ひは知れた事であります。大日如來の功德を説た大日經を讀たり。薬師の御名を稱へたりして。これ阿彌陀様の御淨土へ參らせて下されいとは。門違ひと云ふもの疎ひ事は知れてある。そこで雖可回向得生と願ふたら。參らしては下さるゝが。化土の往生トやぞよと。御誠めあそばしてある。喩へて云へは金子を借用して。返済すへき金がないから。家財道具を代りに返す様なもので。貸主は受取ぬよりはましではあるが。迷惑千萬の事でもやう。今も丁度其の如く阿彌陀様の方よりは。我等が往生の行とて。南無阿彌陀佛の不行を令諸衆生功德成就と與へて下さるゝものを。其不行を餘所にして般若心經を讀誦したり。觀音の御名を稱へたり

これでそれと種々の雜り物を差向けては。御心好くは思召すまい五劫の思案は何の爲にしたらと思ふぞ。兆載永劫のながい修行は云何なる約束と聽聞したか。他力の念佛ばかりにて。往生の契約をして置たにど。不足に思召さいで何とせやう。去り乍ら大慈大悲の親様ぢやもの。設ひ御心には染すとも。さふして惡趣に返さりやう。涙ながらに受取て化土の往生を御許しなされて下さる。されは彼尊の方には衆生の事を一念一刹那も忘れ玉はず。衆生に代りて願と行とを御成就なして下されても。衆生の方には御慈悲を知らず。諸善萬行に心をよせ。如來の御慈悲に背く故。疎雜の行と云ふのであります疎と云ふはうといと云ふ事。親しさに對する言葉で。他人同志ならうといと云ふ事はいらぬ事。親しかつたものが何ぞ心變りがして。遠ざかつて居るを疎いと云ふ。不心得の子が親の處へ往來せぬと云

ふ様なが疎くなつたと云ふものトや。今阿彌陀様の方には無有出離之縁の凡夫と思召て。親切なともく云はん方なき其慈悲に。凡夫の方から背くゆへ疎々しい行ぢやと御意あそばすのである。此筋道が知られたなら。一時も早く雑行をすて正行に歸せずには居られませぬ。次に雑毒と云ふは毒がまゝると云ふ意で。毒と云ふものは命を失ふものである。今雑毒の毒と云ふは貪瞋痴の煩惱を三毒と仰せられて。法身の惠命を害ふものトやと御誠であります。自力の修行をする人々は。急走急作如し拂頭燃し。いかはと勇猛に修行せられても。三毒の毒がまゝるに依て。善は善トやが雑毒の善と云はねはなりませぬ。村上天皇の御時代禁裡に於て。五種の法を修せられた事があります。五種の法と云ふは東西南北中央に壇を飾つて。東の方に降三世明王。西の方には大威徳明王。中央には大日大聖不動明

王と申す様に。五つ所に壇を設け智行兼備の大徳を招いて。修法をなさるゝのであります。慈惠僧正。元三大師は正中の不動明王の壇に御座らせられ。東の方の降三世明王の壇には寛朝僧正が上らせられて修法なさるゝ。其最中へ天皇がそつと覗ひて御覽遊はさるれば慈惠僧正は全く不動明王の體たになりて御座る。寛朝僧正も降三世明王の姿になつて居らるゝゆゑ。扱も尊いことよと思召して居らせられたが。暫くすると寛朝僧正は常の坊様にならせらるゝ。又暫くすると降三世明王の形にならつて居る。慈惠僧正は始終不動明王の御姿であつた故。天皇陛下は嗚呼寛朝は不便なこと。また妄念がやまぬかと御歎息あそばされたとある。斯の如く天下に隠れなき智行兼備の名僧ですら。妄念の止みがたいは凡夫の習ひ。之れが即ち雑毒と云ふものであります。並々の席ではない天子の御招待に預り

禁裡で護摩を焼て御座らせらるゝ間でさへ。妄念が起るでは御座り
 ませんか。まして況や在家止住の泥凡夫。云何程さよめても。これ
 程掃ふても毒が雜らぬと云ふ事はない。御互に祖先の法事をいとな
 まんとて。手次の住職を招待し御内佛は美しく莊嚴供養に手を盡し
 ながら。少し配膳の仕様が悪いと直ぐ血眼になりて。出入の者を呵
 りつけるやら。家内の者に小言を云ふやら。其一念の瞋恚に俱胝劫
 の善根を焼亡して仕舞とある。折角の佛事供養をつとめても。瞋恚
 の毒で何にもならぬ様に搔き亂して仕舞ふ凡夫のなす善根は雜毒の
 善と御誠めあそばし。千中無一とさらわるゝ。眞實報土の往生は一
 人も遂る事の出来ぬとあるが。御開山の御教化。云何に結構な御料
 理でも。毒が雜りてあれば喰べられますまい。云何に廣大な善根で
 も。云何に結構な功德でも。妄念煩惱の毒が雜りましては。何の役
 にもたちませんから。役にたゝない雜行を捨て。清淨無垢な信心を
 戴き。無上寶珠の名號を稱へ。日出度報土往生の素懷を遂げられよ
 ふならば。何よりの仕合。

第拾三席

次に雜修の上の雜行と云ふは。正行に對した名で御座います。今
 此雜修と云ふは專修に對した名であります。雜行の名は行體に付き
 ますから。雜れる行と讀で萬行諸行と同一事であります。雜修の名
 は修相に就きますから。雜へ修すると讀む心もちで。兼ね行すると
 云ふに同一事であります。そこで化土の卷に。雜修者助正兼行故曰
 雜修と御釋あらせられ。御和讃には助正ならべて修するをば。即ち
 雜修と名付たりとも。御意あそばして。雜行を離れて正行に歸し。
 彌陀親近の行を勤むるは結構なれども。其正行を修するに就て。香

華燈明の供養であるが。御經を讀誦するのであるが。禮拜にもせよ讚嘆にもせよ。皆往生の行と計ひ募る故に。雜修と御誠めあらせられた。さて此雜修の出體即ち物柄を申しますれば。上に列ねて御咄致しました處の五種の正行であります。此五種の行の中で第四の稱名を以て正業と名け。後前の四つを以て助業と名けらるゝが。御當流の御教化であります。所謂正は君長助は臣佐で。第四の稱名は王様の如く。前後の四は臣下の如き者であります。なせなれば順彼佛願故と仰せられて。南無阿彌陀佛と稱ふる者を。迎へ取らんと御誓が。阿彌陀如來の御本願でありますから。第四の稱名が王様で。餘の四は臣下であります。さて又助業と云ふに就て。資助の義と助伴の義と二々通りあります。資助の義と云ふ時には助ける事。何を助けるかと云へは其君長たる稱名正業を助けるのです。其

相を辨トますれば。先第一に御經を讀まねば。阿彌陀如來と申す佛はと云ふ誓ひを立させられ。云何なる者を救はせらるゝやら知れませすまい。そこで讀誦正行が始めで。御經の上を伺ふて見れば。從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀等と御説あらせられて。阿彌陀如來が明かに知れます。阿彌陀如來が知れて見れば。禮拜恭敬の心も起り。又どんな處であるかと心の内に觀察と申して。極樂の依正二報を思ひ浮べて見ますれば。恢廓廣大超勝獨妙と勝れた淨土と云ふ事が明かに知れます。明かに知れずと其御淨土へは云何して往生が遂らるゝぞと。聽聞する氣になりませす。聽聞して見ますれば名號六字の御手柄一つにて。罪は云何程深くとも。障はいか程重くとも。助け救ふの佛勅に信順し。攝受衆生の願力に投托し。嬉しや南無阿彌陀佛。難有や南無阿彌陀佛と喜

ふ計りて。浄土参りの出来る事と信せらるゝ味ひが。第四の稱名正行であります。斯る不思議の本願が信せられ。往生安堵の上からは朝な夕な勇ましく佛徳を讃嘆し。佛事を莊嚴する讃嘆供養の働が。顯はれて参りますれば。彌増に信心も増長し。稱名も懈怠なく相續が出来ます。之が即ち資助の義助ける味ひて御座います。次に助伴の義と申すは。伴はともなふと云ふ字で。第四の稱名正行に伴ひ付てまわる行トやと申す事で。喻へは貴族の通行の如く。長持もあるし引馬もあるし。種々の道具が後前に連なつてあれども。約る處大將に付ものであります。今も其通りで。讀誦も禮拜も觀察も讃嘆供養も。前三後一と列ねてありても。約まる處第四の稱名正行に付た者であります。丁度我々に手もあれば足もあり。口もあれば鼻もある如く。若し此中で一つでも缺て御覽。不具でありますやう。信心

決定の身の仕合には。勤行も致し御禮も申し。香華燈明をも捧げ奉る様に成るは當然で。或時は吉野の花を眺めては「咲きつゞく花見る度になをもまた。いと願はしき西の彼の岸」とも。又箱根や伊香保に入浴しては「極樂もかくやあるらんあらとふと。はや参らばや南無阿彌陀佛」とも。其他歌舞技芝居を観るに付け。日光の景色を眺むるに付け。花に向ひ月に對し。山にあらふが野にあらふが。「面白や散る紅葉も咲く花も。自らなる法の御すがた」と。自ら觀察正行が着て顯はれます。此妙味に至りましては。知る者之を知るの道理で。篤と御信心が肝要であります。信決定の身の仕合は。攝取心光常照我。寢るも起るも光明の中。善ければ善いのが御縁となり。悪るけりや。悪いが御縁となり。餘所の小供に窘められ。泣て歸るも母のもと。隣の伯母様に譽められて。笑ふて歸るも母のもと。嬉

ひにつけ悲みにつけ。親縁近縁増上縁切るに切られぬ親子の縁。凡夫の方には忘れても御慈悲の方には忘れ玉はず。忘れても忘れぬ彌陀がある故に。忘るゝものを此身此儘「聞けば聞く程身にこみて。懈怠がちなる私も。彼尊の御慈悲の顯はれを憶念の心常にして。佛恩報する身となるとは。やれく嬉しや難有やと存せられたであるふぞなら。是が即ち正助二業の水際を取誤らぬ。専修念佛の行者と申すものなるが。之に反して禮拜にもせよ讚嘆にもせよ。皆悉く往生の爲になり。力になり當になる様に心得て。自力執心のすたらぬ者を。雑修の行者と申します。サ一皆様は云何であります。専修か雑修か百即百生の同行か。千中無一の連中か。一人の身の上を能く取調べて歸へらるゝが肝要。

第拾四席

雑修に就て二種ある中。第一助正兼行の修雑は辨ト終りました。第二に現世祈禱の雑修。是は御和讃の中に。佛號むねと修すれども。現世を祈る行者をば。是も雑修と名けてぞ。千中無一ときらはるゝと。御誠めあらせられて此むねとすると云ふ事を。一多證文に。むねとすと云ふは本とすと云ふ事を。をぬにするると云ふことであります。彌陀の淨土に往生するに就ては。雑行雑修を投げすて、念佛ばかりを本として居ましても。惡事災難に罹つたとか。子供が疱瘡を煩ふたとか。我身の浮沈にかゝる大事とか。云ふ時になりますと。俄に料簡が狂ふて來て。現世を祈る念佛行者がある。之を現世祈禱の雑修とも部類雑修とも申します。是に又二種の區別があります。一に往生の爲めには念佛一行を修すれども。現世祈禱の爲めには餘佛

餘菩薩をも念ふ。餘行餘善をも修する。かやうな機類が此頃世間に
 澤山ある様であります。實に困つたもので。何故かと申しますれば
 我人御互に萬物の靈長たる人間の果報を受けたる以上は。士農工商
 おのれくの職を守り。人の人たる倫常を誤らぬ様志さへ堅固にあ
 りますれば。禱すとても。神や守らんとあるごとく。此方から強て
 願ひ求めずとも。彼方の方には御油断なく守らるゝ丈は。御守り下
 さるゝから。能々因果業感の道理を聽聞して見れば。設ひ念佛の行
 者でなくとも。凡そ佛教信徒と云はるゝものは。此位な心得はある
 べき筈なるに。往々心得惑へる人のあると云ふは。佛教の爲めにも
 社會の爲めにも。歎かほしひ事であります。或處に多勢の子供が遊
 んで居る中に。村長の子でもあうふかと思はるゝ。人品のよい子が
 五色の色紙を澤山持て出まして。サ一汝等銘々に好きな色紙をやりま

しよふと。申しますと。太郎は赤いのが欲しいと云ひ。次郎は黒いの
 を頂戴と云ふ中に。一人盲目の子が私に青いのを下されよと手を出
 しますと。何に汝は盲目ではないか。盲目に色紙は駄目だ。見ゆも
 くないとせにと勿付られた。盲目の悲しさ。とくく泣て家に歸り
 ますと。母は機より飛て下りまして。坊よ云何した怪我はしないか
 叱からればせぬかと片輪な子は可愛のは親の慈悲。盲目は母の膝
 下に両手をつき。イーエ母様何卒父様に御願して頂戴と。聞く母親
 は背をなぞ何が御願ひ。お饅かお菓子か。オー御饅なりとお菓
 子なりと。坊が好きなものならば。何にでも父様に御願ひ申して遣り
 ますから。機嫌なをしてこれ坊よと。すかさるゝ子はかぶりを振り
 イーエ坊が御願ひはお饅ではありませんお菓子でもありません。彼
 の次郎さんや太郎さんが。赤も黒も見分る様。坊にも何卒眼の見ゆ

る様。母様御願ひ申しますと。聞く母親は云何あるふ。云何に頑是
 がないとは云へ。云何なる宿世の因縁か生れついでに其眼病。さふ
 か癒してやりたひと。眼醫者と聞けば五里十里。ならぬ中から夫婦
 連れ。其方を抱いたり背負たり。泣の涙で此年月僅な田畠も賣盡し
 其眼病の薬代及ぶ限の力を盡し。心盡も水の泡。終に目くらとなり
 し悲さ。母様の知たことでもなく。父様の知たことでもなし。皆是
 れ坊が前生の約束ごとと諦らめて。怨に思ふて呉れるなど。願ふ子
 よりも願はるゝ親の心を酌たなら。昨日今日まで諸の神や佛に無理
 云ふて。御泣せ申した徒らを。今生の親様の御前で改悔懺悔して。
 此世の事は何事も人間萬事塞翁が馬。善いが善いやら惡いやら。皆
 是れ過去の因縁ぞと諦らめさして頂くより外は御座いません。佛號
 ひねと修すれどもと御座います。今生後生共に念佛の外に勝れた

法はないと思ふて信じて居ても。兎角家内安全の爲めとか。病氣全
 快の爲めとかに百萬遍を繰りたり。凡て現世の幸福を祈る等の爲め
 に。念佛を用ゆる者があります。之も雑修の部類であるぞよとの御
 教化。其行體は念佛の一行故に。雑修ではなけれ共。能修の心が現
 當に跨りて。專一でない堅固でない。心の内が雑り心ちやに由て。
 是も雑修の部類ぢやぞよ。仲間ぢやぞよ。其行體は結構な因位の萬
 行果地の萬德。何に不足なく圓滿である南無阿彌陀佛の名號なれど
 も。其結構な名號を僅か現世一旦の幸福を祈る道具とする故に。干
 中無一と嫌はるゝと御誠めあらせられた。昔天竺に長者の息子が愚
 鈍にありませ故。修行の爲めに旅商ひに出しました。其仕込の貨物
 は旃檀香木であります。其息子が片田舎の在郷へ賣に参りましたか
 ら。買人がありませんそふである。茶店に腰を掛まして。其家の婆

さんに。此邊は何に能く賣れますかと尋ねましたら。左様さ此節は寒氣の強い時分なれば。けし炭が一番よく賣れますと申しました處が。彼の結構な栴檀香木を火に焚てけし炭にして。賣廻りましたら。暫時の間に賣盡しまして。漸く百文ばかりの錢を得て。恰憫そふに鬼の首でも取た様な勢で家に歸りた。御經に説てあります。今も丁度其通り本願成就の南無阿彌陀佛は。無量永劫の苦みを抜て樂を與へて下さるゝ寶であります。其大切な名號を浮世の事に用ふるとは。阿房ものとも馬鹿ものとも。喩へがたなひ徒ら者。栴檀香木を置いてこそ價ひが高ひものなるに。炭にしたなら僅の百文。未來の爲にすればこそ。萬善萬行恒沙無數功德利益の重寶なれば。現世祈禱の百萬遍に使ひはたしてのけましては。設ひ利益があるにもせよ。電光石火またく間。けし炭同様をさげない。阿房を事をして

呉れるなど。涙ながらの御教化を。餘所事に聽聞せられては。残念千萬。

第拾五席

自力の心とは是にも二通りの意があります。一に雜行も雜修も皆自力の心で修するものでありますから。雜行雜修を修する自力の心をつり捨てよと云ふ事でありませす。二には雜行雜修をすてよと計ひありては。自力の專修はよい様に。思ひ惑ふやからかあるかも知れませんから。そこで自力の心と云詞を添へさせられて。雜行雜修ばかりでなく。ありとあらゆる自力の心は皆捨てなければならぬ。設ひ念佛一行あらふとも。正定業たる稱名念佛を以て。往生淨土の正因と計らひ。募るすらなは以て凡夫自力の企なれば。報土往生叶ふべからずとの思召で。自力の心と仰せられたものであります。去れば

只今の御文は雜行と雜修と自力の心との。三重のあらびを以て。あらゆる自力を簡ひ盡させられたものであります。先初に雜行と云ふ所では。淨土の行にあらざる諸善萬行をみなすてよと仰せられ。次に雜修と云ふ所では。既に諸善萬行は捨たれども。淨土の行を修するに就て。また雜修のやまぬ者があるに依て。雜修を止めて專修になれよと仰せられ。次に自力の心をふり捨てよと云ふは。設ひ雜修をすて、專修になりても。自力の心がすたらひでは報土の往生は遂げがたいに依て。そこで自力の心をふりすてよ。他力の安心を戴けよと仰せらるゝ。ふりすてよとは捨て、願みざる心であります。又の御教化には。投捨てよとも。さしおきてとも。目をかけずともあります。明來闇去々々明來。自力を捨てるると他力をたのむと。更に前後のあるものではありません。所謂佛の捨てしめ玉ふものは則ち捨て。佛の行せしめ玉ふものは則ち行す。是を佛教に隨順し佛意に隨順すと名けます。雜行すて、彌陀をたのみ。他力の安心を戴いて報謝相續の稱名を喜ぶ中には。仁義も道德も孝悌も忠信も。任運無作に顯はれ。日出度日暮しの出来る身とされるのが。二諦相資の御宗風でありますから。必ず、死を行く後の事のみちやと心得ず。只今から無明の道中を離れ。光明の道中となり。明るい世渡をさして貰ふ様に。御聽聞になられいでは。活て働く眞宗の御化導とはいはれません。譬へは納戸の奥が闇ふては。何處に父親が寢て居るやら。母親が云何して居らるゝやら知れますまい。そこで父親の頭の上に悴の足が付て居るか。母親の枕元に嫁さんの御臀がいつてをろふか。寢さまの悪い娘が枕を外して大の字なりになりて居るかが可愛ひ孫が蒲團の外に出て居るふか。可愛そふなとも。恥かしひと

も。勿體ないとも思ひますまい。思はん筈トや。闇ひから分らんのであります。然るに其處へ洋燈を持って参りますと。能く分りましたよ。分りてみますれば。これく親父様は其處にお休みでしたか。恐れ入ました御免なされて下されませと。嫁も悴もあやまります。娘は恥て寝さまをなほしますも。婆様が孫を引寄せて蒲團の中へ入れますものも。皆悉く洋燈の明の効能と申すもの。今も丁度其通り煩悩の大酒に酔ひ倒れ。無明の暗夜に高軒聲をかき。因果の道理も辨へず。未來の大事も苦にならず。往生の親様に背後を向け。地獄も極樂もありはせぬと。土足にかけた徒ら者。偶々御座に参詣して善知識の御化導を聴聞し。雜行雜修を捨てよとあれば。片意地な御勸トやの。遍屈な御宗旨トやの。嘲けるやら謗るやら。惡人其儘を聞き誤りては。慚愧の心は起らずして。邪見なものがお目當トやの

惡い者が正客トやのと。親子の間も夫婦の中も。此世からなる修羅畜生。大慈悲の親様の御胸を刀で刺した身に。衆生貪瞋煩惱中。能生清淨願往生心。明信佛智と明かなる御慈悲の洋燈が戴かれ。我身は惡しき淺間敷地獄者ぢやと誤り入り。斯る者が助かると云ふは偏に願力の御不思議ぞと。二種深信の御化導に基かれた上からは。親となつては親の道。子となつては子の道に。怪我過ちのない身の上は御育に預るのが眞俗二諦の御宗旨。

第拾六席

拙僧が先年或る將軍の御邸へ参りまして。圍碁の御相手を致し。色々御馳走になつた事が御座います。其頃は殆ど暑中の砌でありまして。日中に庭の片隅に屋敷の仲間が二三人も掃除を致して居ります私共が靜に碁を打て居りますのを。羨しく思ふたものと見ゆまして

ひそく耳語ますには檀那杯は實に結構な者である。こんな暑い日
 でも。あんな廣い座敷の真中で。西瓜とかラム子とか色々御馳走は
 あると三人も五人も別嬪が交るく来てあふぎはするし。少しも暑
 いと云ふ事を御存はなく。而して御用へは月に五回か七回か陸軍省
 へ御出仕になる計りで。それも途中は馬とか車とか氣樂な話し。そ
 れに月給はと云へは毎月貳百圓とか參百圓とか。實に甘いものトや
 巳等は朝から晩までこき使はれて。汗水たらして働ひても。僅かに
 五圓か參圓の給金にしかならん。こんな馬鹿氣な事はないと云ふ話
 が。將軍の耳へ這入まして。小野島君あれを見なさい。あんな了簡
 で居る者だから。何時迄たつても人間らしき者にはなれぬものであ
 る。實に可愛そふな者トやが。君は御寺さんの事だから。さふか爰
 で彼等に説教して貰ひたいと申されまして。私も殆ど當惑しました

然るに將軍がこりや〜貴様等皆此處へ來いと云はしやると。イヤ
 大變です貴様が馬鹿な事を云ひ出したから。檀那の耳には入たのト
 や。イヤ貴様が愚痴を溢すから。己等向櫃を打た計りの事トや。行
 つたら最後そんな御目玉を頂戴する事やら分らぬと。押問答して誰
 ゆけ彼ゆけど。愚圖くして居りますと。將軍は笑ひ乍ら何も叱る
 のではない。暑からうから此處へ來て一ふく吸ふがいよ。氷水なり
 西瓜なり遠慮なく喰べるがよいと。思の外の御機嫌であるから。漸
 く胸が収つたと見ゆ。ほつ〜出て來て椽側に腰をかけますと。ラ
 ム子や西瓜を出して喰べさせます。處へ將軍が小野島君今君にたの
 んた事を。やつて貰ひたいと云はれますから。無據私も何か早合點
 の參る様に。一口話を仕様と思ひまして見ますと。其處に最前西
 瓜を切りました。小刀が御座いました。其小刀を取りまして此は結

構な小刀で御座いますが。大分致しませぬ。實に此小刀と申しますものは。重寶なもので柿をむくにも紙を切るにも。何をしましても常に入用なものでありますと申します。將軍の云はれますには。左様さ誠に小刀杯と云ふものは便利なものですが此は慥か三平貴様が買て來たのであるのふ。いくらであつたかいと問はれますと。仲間の三平が左様で御座います。それは先夜下町の縁日で。若様の御供をして参りました節。買ふたので御座います。なに代價はタツタ五錢で御座いますと答へました。乃で私が座敷の床にありまする所の洋刀を見まして時に將軍の洋刀は大層御見事を物であります。失禮ながら餘程の大金でありましょと御尋ね申します。ナニ格別なものでもありませんと仰しやいました。乃で彼の仲間共に尋ねますには。御前等は御屋敷に居る事だから。檀那の洋刀を拜見致

した事があるたらう。何と立派な物ではないかと申しますと仲間の答に左様であります。私は此御屋敷へ五年前から御奉公致して居ります。未だ一返も中身を拜見致しません。御立關で書生さん方の御話を聞きますと。何たか大變なものたそふで御座います。御造は残らず金無垢で。中身は慥か永正祐定とか申します名劍で。中々大枚な御金がかゝつて居りますそふで。そこで私が申しますには。彼の洋刀が何か御用に立たのを見た事があるかと尋ねますと。イエ、く、さふして月に五返か七返か檀那が御出勤あそばすとき御供を致す計りで。其他は何の働もせず。御床の上に寝て計り居りますと。答へましたから。左様かいそんな馬鹿な事はない。さふちやい彼の洋刀を賣て。此な小刀を買なら。千本も萬本も買へるたるふ。シテ見ると重寶になる小刀に換へてはさふちやと申しましたら。仲間共

が眞面目になつて。さうして左様な事は出来ませぬ。いくら小刀が千本萬本ありましたとて。眞逆國家の一大事に。戦争にせよなつたときには。彼の洋刀をなくては間に合ひません。とんだ事を仰しやりますと。少し私の語を輕蔑する様な語氣でありました。それから私が膝立て直して。彼等に諭しますには。そこであるく御前等は。此道理が分つて居りながら。何故今しがたの様なぬるい愚痴を溢すか。諭へは將軍はあの洋刀の如きもので。常平生は遊で御座る様に見ゆれども。片時も國家の大事を御忘れはない。一朝國に事あるときは。千軍萬馬の間に立ち。一號令の下で天下の安危存亡がさまると云ふ。大任を以て居らつしやるのである。御前等が如き者は。恰ど此小刀と同様で。朝から晩まで働いた處が。五拾錢か參拾錢の効能しかない。其智慧分別が違ふて居ると云ふ。己れくの分限

が知れない様な事だから。兎角に他を羨んだり嫉んだりして。とうく一生涯を空しく終るのであるから。少しは物に注意をして。人間らしゆふなる考へがなくてはならぬと。申しました處が一同が誤り入て扱々今日迄は。浮かく日暮しを致して居りましたが。是より心を改めまして勉強を致しますと。それから後は打て變た人物となりまして。其中の一人は只今立派な者になつて。時々私の處に参りましては。昔の事を慚愧して居ります。爰でありますぞ。雜行捨て彌陀をたのめの御教化はこゝでありますぞ。雜行雜修の自力作善はこれほごあるふとも。皆是れ雜毒の善。虛偽の行。小刀同様の代物であるから。煩惱惡業の強敵を打滅して。報土往生の凱歌を奏すると云ふ様な大きな仕事は。夢にも出来ないが。難有いことには利劍即是彌陀號一聲稱念罪皆除。彌陀大悲の利劍たる南無阿彌陀佛

の名號は向ふ處敵なく。煩惱惡業を退治して。正定不退の大平を樂ませせて戴く事と存せられたであらふぞなら。永正祐定の名劍を。無暗に小刀の代りには使はれますまい。南無陀彌陀佛の名劍を。現世祈禱の小刀の代りに使ふ様な事がありました。實に申譯のなひ事故。現世の有様は過去の宿業に任せ。後生の大事は往生の親様に任せ奉り。やれく嬉しや難有やと。法義相續が肝要。

第十七席

前席にも御話致しました通り。我々凡夫の淺果敢なる智惠分別を以て。無爲常住の極樂淨土へ。是なら參られやうか。それなら行けやふかと。いくら計みて見ましても。ありもならないが。あるに似た處で。有漏の少なき善根功德の小刀細工では。逆もく三惡道の關所を切り抜けて。安養淨土の本城へ歸る譯には參りません。大悲の利

劍たる金剛不壞の信心一つにて。往生の素懷を遂げ奉る事の嬉しやくと。只々仰ひて信するの外は御座いません。彼の中仙道にある熊谷寺の寶物の中に。法然上人御親筆の六字の名號が御座います。此名號の無の字の點が一つ落ちて居ります。これはどふ云ふ因縁かと申しますに。蓮生坊と申す人は。至て仰信な人でもあるし。質朴な方でも御座いました。何分にも子供の時から猪武者と云はるゝ程の人で。法然上人の御弟子にならつてやつても。どふも其烈き氣質はぬけません。素より武人の事で。格別學問もなく殊に年取ての發心故佛學杯に疎いのは當然であります。それ故仲間の人と法門の議論を致されましても。何時も負けられます。或時若輩の沙彌から問答しかけられて。一句の返答も出来ません。乃で傍に居る朋輩は竊に笑ふと云ふ様な有様で。蓮生坊の胸の中は悔しめてたまりません

其翌日の事。昨日は彼の小僧から。多くの大衆面前で。恥かしめられたが。若し今日も問答に重て負ては。面目次第もない事だから。今日こそ負けたら刺殺して。自身も潔く切腹して死にさへすれば。申譯は立つ事と。むらくと噴患の炎らがもれたちまして。法衣の下へ短刀をさして。御庵室へ出られました。如何にも其顔色や様子が變て居る處を。御師匠様は竊に御覽になりまして。さてく困たものである。氣の毒な事である。兎角昔の氣質がすたらいで。時々心配をさする事である。如何かあの心をなほさせたいものであるとの思召で。暫く御思案あらせられました。偕て此蓮生坊が豫て御師匠様へ御名號を願ふて居られました。今迄御筆が立ませなんだ。是こそ幸の事であると思召。蓮生坊を御呼寄せになりまして。蓮生坊殿いづぞやから認めて進せやうと思ふて居たが。兎角多忙で今日

まで延引致した。あの御名號を。今日は書て上ますと仰せられます。以前の顔色も變りまして非常に喜ばれ。御文庫を取出すやら墨を磨るやら。いそぐして絹地の向ふを押し居られます。乃て法然上人は御筆を立させられ。さらくと六字の名號を御認めに相成まして。其後では飛んだ事をしたと。御當惑の體故。蓮生坊が御師匠様とふあそばさしたかと。御尋ね申上られますと。折角認め九御名號の無の字の點が一つ足りなひ。書換るのも面倒だから。此儘にして置さまじよふと仰しやりますと。中々さかない氣質故。それは御師匠様いけません。どうか御書替下されませと申されますと法然上人の仰しやるには。いやもふ是を勘辨して貰ふ。いやくそれではいけません。勢觀房でも念佛房でも。皆あの様に立派な御名號を頂戴して居りまするに。私の分たけに誤字があつてはさうもい

けません。是非御書換をと強て願はれますと。法然上人莞爾と笑はせられ。其一點は御前の手元にある筈だが。それを私に渡すなら書換て上げまらよふ。これはらたり御師匠様。それや何と仰しやりますか。此一點が私の手元にありますとは。合點の行ぬ御話と。不審を起して尋ねらるゝと。其一點は外ではない。法衣の下にさして御座る其短刀が此一點。如何に其許が豪傑でも。云何なる力があるにせよ。此六字の名號の無の一點の力にはよも及びは致すまい。利劍は即ち是彌陀の名號。八萬四千の煩惱を一稱唱ふる念佛の力一つで消し滅す。此廣大なる御由れを信せられたる身であり乍ら。兎角昔の氣が失せず。僅かな事に腹立てゝ。大慈大悲の親様の。御胸を痛めて下さるなど。涙ながらの御化導に。蓮生坊は兩手をつき誤入り。御詫を申し上らるれば。御師匠様も御満足あらせられ。そふ心得て下さるれば。法然も大喜び。それ〱書換へて上ますと。御意あらせられますれば。蓮生坊は涙乍ら。いや御師匠様御書換には及びませぬ。只今の御化導は此蓮生の骨身に徹し。實に誤入りましたれど。云何も捨たらぬ短慮な氣質で御座りますれば。又々そんな邪見しでかすやら分りませんから。此御名號を頂戴致しまして。一生蓮生が肌身を離さず。守本尊に供へますなら。忘れ勝の愚な者も。よもや忘れは致しますまいと。一生の間御給仕申上られ。其後は殊の外やさしい氣立になられたとある。

第拾八席

一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生。御助候へとたのみ申して候。所廢は上に終りまして。二に所立であります。所廢とはすてももの。所立とは貰ひもの。捨ものとは雜行雜修自力の心。貰ひも

のとは。他力御回向の信心であります。其信心と云ふは何の用ぞと云ふに。無善造惡の我等が様なる淺間しき凡夫が。たやすく彌陀の淨土へ參りなんする爲めの出立なり。此信心を獲得せずは極樂には往生せずして。無間地獄に墮在すへきものなりと。御意あらせられてあります。サ一皆様未來迷ふか證るか。地獄か極樂か。鬼か佛かの境界であります。浮か〜聞流してはなりません。さて其他力御回向の信心を御教化あらせらるゝ御言が。一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生。御助け候へとたのみ申して候。是丈の御言葉が。つゞめて見ればたつた三字。たのみより外はありません。たのみとは信心の信の字の和訓で。御當流では至極大切なる文字であります。扱て其たのみとは何をたのみか。藥師様でもない不動様でもない。本師法王の阿彌陀如來をたのむのであります。乃て阿彌陀

如來の五文字が入用であります。彌陀をたのみと云ふ事は分つたが何とたのみことやら分らぬ。乃て御助け候へとたのめとの思召であります。さて又たのみに付て二心がありてはいけません。後生の一大事に驚きの念がなくてはなりません。そこで一心も我等が今度の一大事の後生と云ふ。御言葉も入用であります。然れば此所立の一段。御言葉は數々ありましても。つゞまる處はたのみの三字即ち他力回向の信心を御教化あらせられたものであります。其中で當席におさましては。先づ初の一心のころを御取次に及びます。一の言は無二に名く。二心なく疑なく雜行捨て、餘所見せず。身も心もちこんで。如來をたのみ奉る一心が即ち極樂參りの種であります。逐二二鬼者不獲二一鬼。兎角心が兩端に跨りましては。つまりが蛇も取らず蜂も取らずになります。去る處は一人の男子が年増と新造

と二人の女を寵愛して居りました。處が年若の女房の方へ参りますると白髪を抜きます。又年増の女房の方へ参りますると。黒い毛をぬきます。とふも女の云ふことは。厭やと云はれぬものと見ゆまゝで。彼處でぬかれ此處でぬかれ。とふく毛一本もない様になりて仕舞ました。そこで二人の女が申し合せた様に。御前さんの様に薬罐頭はいやでありますよと。愛想をつかしたと云ふことであります。が。何と氣之毒な事では御座いせんか。心が兩端に跨りますると此様なもので。雙方にすかれよふとして。却て雙方に嫌はるゝ事になりまゝ。故にかねく御聽聞の通り。御當流に置ましては。更に餘の方に心をふらす。餘佛餘菩薩をたのむぢやない。餘行餘善に目を掛くるな「三心なくたのめは救ふ彌陀佛の。外をたのむは無益なりけり」。一心ぢやぞよ一向ぢやぞよと。御親切なる御教化であり

ます。一心の力と云ふものは不思議なもので。昔彼の雪舟と云ふは有名な畫家で。此人幼少の砌去る寺の小僧でありし時。畫を書く事が非常に好きで。御經は少も覺ゆせんから。師匠が度々の切諫。いくら切諫されても聞かれません。而して畫はつかり書て居ります故或日の事でありまゝ。師匠が大いに立腹致しまして。引捕て本堂の柱に縛り付ました。すると大聲あけて泣出しました。後には泣聲が止で静になりました。ハテどうしたであらふか救してやろふ可愛そふなど。和尚が覗ひて見ますると。小僧の足元に鼠がビヨンク跳まはりています。ハテ怪からぬ事と寄て見ますれば。眞の鼠と思ひの外。小僧が溢した涙を足の指に付けて。敷居の上に書た鼠の畫でありましたとの事。一心の力と云ふものは恐しいものであります彼の有名なる兆殿司は。聖一國師の弟子で。幼少の時より之も至て

畫が好きで。毎日く飯焚役を云ひ付かり。竈の前にて火を焚きながら。火箸で灰かきならし。畫はつかり書て居る故。飯が何時でも焦げる。其度にいくら切諫しても。何の効能もなく矢張しがらます。師匠も堪忍囊の緒がきれて。非常の立腹して。師匠の云ふ事を聞ぬ奴は。一日も此寺に置ぬから。早速出て行けよと叱られます。兆殿司は涙乍らに両手を付。恐入りました。御師匠様此後は決して畫は書きませぬ。決して飯は焦らませぬ。何卒く御勘辨をと誤ります故。然らば此度は許して遣はすが。此後再びこんな事があつたらは。承知せぬぞと云はれます。兆殿司は難有うござります。臺所へ下りました。翌朝臺所に焦臭い香がする。ハテ困つた奴ぢや。昨日あれ程叱て置たに又焦らしたかと。聖一國師が竈に障子の隙まから覗て御覽なされると。不思議なるかな竈の前に。炎々と燃

け上る猛火の中に。不動明王が利劔を握て御立なされてある。さてく難有や。生身の不動様を拜み奉るは。生れてより初めてあると。珠數さらくく押揉て。不動明王の咒文を唱へて御座ると。忽ち不動様の御姿が搔消す様になくなりて。兆殿司は周章たゞしく火を揉み消して居られます。聖一國師は不動明王を拜んだ事の難有さに。其日は何の小言もなかりしに。又候翌朝も焦臭い香がするから障子の隙間から覗て御覽になると。今度は竈の前に大きな牛が寐て居ります。ユハ云何にとよくく見れば奇怪千萬其牛の頭は兆殿司である。師匠の聖一國師は驚かせられて。兆殿司くと呼はせらるれば。又叱らるゝ事かとおづく方丈に参ります。聖一國師は涙乍ら。不惑や汝は畜生道に墮て居る。云何に愚鈍な生れぢやとて三衣一鉢の身の上となりしものが。畜生道に落ちたとは可愛そふな

ことである。意外の仰せに。兆殿司はびつくりせられ。何を仰せられます。私は御承知の通り愚なものでは御座います。畜生道へ落ち覺は御座りませぬ。何を證據に御意あそはすと問はるれば。去ればの事今障子の隙間より覗いて見れば。竈の前に大きな牛が寐て居る。ユハ怪からぬと能く見れば。體は牛ぢやが頭は汝の頭であつたぞよ。昨朝飯の焦たときは。竈の前にて生身の不動明王を拜み奉り。あら難有やと昨日一日喜んで暮したに。今朝は悲しや情なや。自分の弟子が生きた乍ら畜生道へ落るとはどの御歎き。聞く兆殿司は兩手を打ちア、難有や忝なやと躍り上りて喜べは。聖一國師は大喝一聲。馬鹿者め。畜生道に落て何が難有い何が忝いと叱られるれば。それには深い譯が御座ります。一通り御聞きなされて下されませ。昨朝は火を焚きながら灰掻ならし一心に不動尊の御姿を

書て居りました。只今は牛の姿を書て居りました。此一心が徹到して私の姿が。牛ともなり不動様ともなりましたので御座りませよふと申上れば。聖一國師は感心あらせられ。是より汝一心に充分畫道を勉強し。諸佛菩薩の尊像を描き奉り。畫道を以て衆生濟度をするがよいと御免になり。段々出世して古今無類の大家となられました。一心の働きはひよいものであります。兆殿司の姿が牛ともなれば不動様ともなります。何ぞ況や他力回向の御信心。信心と云へる二字をばまことの心とよむうへは。凡夫の迷心にあらず。全く佛心なり。此佛心を凡夫に授けらるゝとき。信心とは云はるゝなり。無漏清淨の御慈悲より。授けたまはる一心なれば。不可思議の利益は當然で。鬼と佛の早變りは。未來ばかりの事ではない。たのむ一念の其時より。南無阿彌陀佛の主となり。南無阿彌陀佛に身をは丸め。

南無阿彌陀佛が乗り移て下され。親子も夫婦も兄弟も。主人も家來も皆悉く。他力御回向の一心を戴き。やれ嬉しや難有やで。日暮しをする様にありますれば「稱ふれば人もおのれもなかりけり。南無阿彌陀佛」。佛同士の寄合に小言のあらふ筈はない。喧嘩のあらう道理はない。なか睦まどく面白く笑ふて家業を勉強せば。笑ふ門には福來る。此世も安樂後の世も。現當二世の大仕合。

第拾九席

今生一世の上で申して見ましても。何事にも一心が肝要トや。まして況や出て行く後生の一大事。鬼と佛の早變り此上もない大仕事なれば。二心がありましては。必ずしく仕損ひを致しまするぞ。兼々聽聞の通り。十方恒沙の諸佛と申して。東西南北四維上下の十方世界には。天竺の恒河の沙の數程。大勢の佛菩薩方が居らせらるゝけ

れ共。惡人凡夫を其儘ながら。助けてやろふ救ふてやろふと。喚で下さる、御方は。唯の一體もござりません。それは又何故かと尋ねて見ますれば。そもく男子も女人も罪の深からんともがらは。諸佛の悲願をたのみても。今の時分は末代惡世なれば。諸佛の御力にては中々叶はざる時なり。彼尊方の衆生濟度の御力より。我等が煩惱惡業の力が餘程強い。ズット上手であるから。可愛そふぢやが不愍ぢやが。逆も助ける事の出來ない。救ふ事の出來ないと。泣々御捨あらせられたのであります。捨た諸佛に無理はありません。捨てられたが身の因果であります。併し乍ら喜ばつゝやれ「捨られて身はなきものと思ひしに。嬉しや彌陀の拾ひ子となる」捨た諸佛がある故に受取る彌陀はこゝに居ると。本師法王の親様は我助けずんは又いづれの佛の助け玉はんぞと思召て。五劫に思惟の胸を焦し。兆

載永劫に一人の身替に御修行あらせられ。十劫正覺の曉より。大音宣布と聲はり上げ。末代の凡夫罪業の我等たらんもの。罪はいかほど深くとも。吾を一心にたのまん衆生をば。必ず救ふべしと仰せられたり。無明業障の恐ろしき病ありとて苦にやむな。癒る仕掛は無碍の光明。必ずく危ぶむなと呼で下さる。御勅命が聞けら。捨た諸佛に用事はない。一心一向脇目をふらず。ひとと縋り参らするより外は御座いません。この所を一の言は無二に名くるの言なりと。一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御助け候へとたのみ申して候との御意であります。斯く申せは。成程それでは阿彌陀如來御一佛の思召には叶ふが。餘佛餘菩薩の御氣に障りますまいかと。思はつとやる方もあるかは知れませんが。中々そんな譯の者では御座いません。そんな心配は無用であります。其譯は十方

の諸佛も恒沙の薩埵も。嫌で衆生を御捨なされたのぞは御座いません。此方の業や障が多い故。涙ながらに見離されたのであります。見離してはみたもの。ごふか助かる工夫はないかと案下下さる。其矢先へ法藏菩薩が五劫の間の御思惟と。兆載永劫の御修行とで凡夫の往生を御成就なされたと聞かせられ。固より佛や菩薩は同體の御慈悲ゆへ。我執もなければ我慢もなく。迎も力が及ばぬと捨た我等に引替て救はせらる。御佛が出来た程に。たのめやすがれよと御勧め下され。不可思議功德と稱讃なされる。此御勧めに従ふて彌陀の本願を信する者を。妙好人なり希有人なり。最勝人なり上人なり。人中の芬荼利華なりと。御譽めなされて下さる。は。云何と九譯かと伺へは。今の時の衆生阿彌陀如來を信し念佛申せば。一切の諸佛菩薩は我本師阿彌陀如來を信するに。其いわれあるに依て。

我本懐と思召が故に。別して諸佛をとりわけし信せぬとも。阿彌陀佛一佛を信し奉る内に。一切の諸佛も菩薩も皆悉くこもれるが故に。唯阿彌陀如來を一心一向に歸命すれば。一切の諸佛の智慧も功德も彌陀一體に歸せずと云ふことなきいわれなればなりと知るべしと仰せらるる。サ一斯様に聽聞して見れば。餘佛餘菩薩をたのまずして彌陀の本願を深く信するが。却て彼尊の思召に叶ふと云ふものであります。何と不思議な事では御座いませぬか。無量永劫迷を離れる事の出來なした身の上。淨土參りをするばかりか。見捨たまひし佛や菩薩にほめられる仕合は。偏に他力回向の信心の御利益と、深く相喜ばねばなりません。

第二十席

信卷の上から戴て見ると合三爲一と仰せられて因願の三信を御

つゝめなされたが。論主の一心歸命。それを和らげさせられたが今此所立の一段であります。源と第十八願の上。往生の正因は至心信樂欲生我國と御誓なされてあるに由て。信心を三つ揃へてかゝらねばならぬ杯と。心得違ひの者が出来ては大變ぢやと思召し天親菩薩は世尊我一心。ユリヤ〜愚鈍の衆生よ。三信とあればとて信心を三つ揃へねばならぬと云ふのではないぞ。是即三信とは云へども只彌陀をたのむ所の行者歸命の一心なりと。御親切なる御教化。ソリヤ又云何いふ譯と御開山様に伺へば。一心の中に至誠回向の二心を攝在せりと仰せられて。至心は清淨眞實。欲生は大慈回向。是れ皆極樂參りには無くてはならぬ道具立ちやが。其必要の道具立ち。眞中の信樂無疑の一心の中に。皆備はつてある故に。吾等凡夫は無疑信樂の一心を戴きさへすれば。清淨眞實の至心も。大悲回向の欲

生も。極樂参りの道具立は何一つ不足はないのであります。それ故に何も知らぬ爺婆でも。御前の安心はと問れたとき。彼の如來様の御蔭で極樂参りをさせて戴く事と。疑ひ晴れて居りますと答へまじよふ。ソレ御覽なさい。此御言葉の中に自ら三信の意味が籠りて居ります。彼の如來様の御蔭とは至心。極樂参りをさせて戴くとは欲生。疑ひ晴れて居りますとは信樂。何も知らぬ爺婆が。そんな密細な義門を知りて居る筈はなけれども。戴いた無疑の一心に。至心と欲生の二つが籠つてあるから。自督を述る言葉にも。自ら三信の意味が備はるのであります。依て至心とあるふが欲生とあるふが戴く時は無疑の一心。疑ひはれて彌陀をたのむより外はないのであります。生死の家には疑を以て所止とし。涅槃の城には信を以て能入とす。斯く申せば疑のないのが信心ぢやと云ふ事を聞て。疑ひて

はならぬ疑ふてはならぬと。疑ひを除けることに骨折る人があるかも知れぬが。云何程疑を除けにかゝりても。自分の力を除ける事は出来ませぬ。依て曇鸞大師は來闇去と仰せられ。千歳の闇室と云ふて千年もたてこめてある。闇室の暗を除けたいと思ひ。帚で掃ふても團扇で煽つても。闇は除きませぬ。然るに明來闇去と云ふて。其闇室へ燈火を持ち込めて見れば。闇は獨でに去る闇の去た後には何が残る。明より外はない。闇の去ると明るくなるとは同時刻で。今云何して見ても疑は晴れぬ。云何してみても落付かれぬと。暗い心をつかまへて。定散自力の帚や團扇で。はらす事にかゝりても。未來となれば何時でも先が暗いけれど。暗い心の世話をやくではない。そんな眞黒闇の心中へ。南無阿彌陀佛の燈火を善知識の御勸より心の底に持込で貰ふなり。名號の所由が聞付られ助かる縁のない此

私仕様のつきた此なりて。御助下さるゝは彌陀一佛と。曠劫已來の初事に疑の闇のがりりと晴る。其晴れた後には何が残る。何時死んでも極樂參りと。安心の明が残る。是が即ち明來闇去。明は信で闇は疑であります。闇の去たが即ち明。疑の去たが即ち信。久遠劫來しみついた疑ひ深い私が。彌陀の本願に疑ひ晴れ。後生一に夜があけて。世の諺に云ふ如く。親の心を子が疑ひ。子の心を親が疑ひ。妻は夫の心を疑ひ夫は妻の心を疑ふ。互に疑ふ此胸が彌陀の誠に疑ひはれて。出かける未來に夜の明けたは。さらく私の手柄でない彌陀の實意に明かされたのぢやと。存せられたであらふぞなら。廣大深重の御恩徳。戴き上ては南無阿彌陀佛。

第廿一席

次に阿彌陀如來とは所歸の佛體を擧げさせられ。餘佛餘菩薩をたの

むでない。餘行餘善をたのむでない。只彌陀一佛に向つてたのめよとの思召であります。御文章にも南無の二字は衆生の彌陀如來に向ひ奉りて。後生助けたまへと申す心なりと仰せられて。此向ふと云ふが肝要であります。脇見して餘佛餘菩薩に向ふのなら。雜行雜修を捨る筈は御座いません。うつむいて我機に向ふのなら。猶信罪福の區域を脱する事は出来ません。そこで餘佛餘菩薩に向ふのではない。我機に向ふのではない。攝取不捨の故に阿彌陀と名くとある大悲の親様に仰ひて向ひ奉り。是より外へ向くなと云ふ事を。更に餘の方へ心をふらすとも。水火の二河を顧みずとも。仰せられてあります併し向ふと申しても姿のことではありません。心が向ふことで心が向ふとは名義の如く。聞開きて背く心のない事があります。汝一心正念にして直に來れとあるも同ト事。直に來れとありても身

體が歩む事ではない。無疑無慮ひとすがるより外はありません。然るに昔も異解者がありました。此處の文を解して阿彌陀如来とは繪像木像の事で。繪像木像の御前に出て。合掌禮拜するが身業。後生助け玉へと願ふが意業。申して候とは口業即ち三業歸命である杯と。飛んでもない間違を主張して。人をも迷はし我身も迷ひ。往生の善知識にいかい御心配を掛た事で御座いました。實に恐れ多い事でありませす。兼々御聽聞の通り。御當流の安心はつづめて申せば。たつた一口疑ひ晴て彌陀をたのむより外は御座いません。然れども此阿彌陀佛と申すは云何なる佛ぞ。阿彌陀様はどふ云ふ御方であると云ふ事が。充分ならぬでは。たのむ思ひの起るものでは御座いません。依て是から。阿彌陀様は云何云ふ御方であると云ふ事を御取次に及びませす。名詮自性であるから何故に彼尊を阿彌陀と申し奉

るかと云ふ事を聽聞すれば。自ら如何云ふ御方であると云ふ事が分ります。それは今更こと新しく申す迄もなく。三千年の昔大聖釋尊小經の會座に於て八萬の大衆の中智慧第一の舍利弗尊者に對せられ舍利弗汝が意に於て云何。彼佛を何故に阿彌陀と號するぞと。御尋ねあらせられたけれども。總て佛境界の事は唯佛與佛の知見なれば智慧第一の舍利弗尊者も一言の御答へもなく。唯黙して居られました。其時釋尊舍利弗よ汝知らずは語りて聞かさん。彼佛の光明は無量にして。十方の國を照したまふに障礙する處なし。是故に阿彌陀と號す。又舍利弗よ彼佛の壽命及び其人民も。無量無邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名くと。光明無量壽命無量の二徳から。阿彌陀と名け奉ると説かせられてある。是が誠に難有いところでありませす。光明は智慧の相にして。愚痴無明の因を破り。壽命は生死流轉の果

を滅したまふ。無明と云ふは智慧の明の少くもない。即ち愚痴の事
 で。愚痴が體になりて疑ひが起り。疑ふ故に迷ふのであります。御
 和讃に流轉輪廻のきはなきは。疑情の障にこくぞなきと仰せられ。
 苦より苦。冥より冥と彷徨ふのが無明の闇がはれぬからであります
 然るに此光壽の二徳に歸命すれば。迷ひの因果共になくなる。此の
 所由を六趣四生の因亡ト。果滅すると知らせ玉ふ。左れば無明の疑
 惑を照破して。眞因を決了させて下さるゝは。光明の徳用。生死を
 解脱して妙果を證得させて戴くは。壽命の徳用であります。超世無
 上に攝取し。選擇五劫思惟して光明壽命の誓願を大悲の本とし玉へ
 り。十劫正覺の曉より光明壽命の誓願を満足し。こいよ來れよ待て
 居るぞよと。呼で下さる御佛が。大慈大悲の親様ぞと存せられ。更
 に餘の方へ心をふらす。水火の二河を願みす。久遠劫來の初事に已

れを忘れて御助け候へど。たのみ奉るより外は御座いません。

第二十二席

彼の毛利家の御先祖元就公。御幼少の砌安藝の宮島へ御參詣なされ
 其時從者が神前に跪ひて。何事か一心不亂に祈念をして居ります。
 乃で元就公は子供乍らも不審に思召し。汝は何事を祈念するぞと御
 尋ねなされたら。從者答へて郎君安藝に主たるを願ふのみ。何卒郎
 君が文武兩道を御勉強ありて。御成人の後は天晴の御大將と御成あ
 そはし。此藝州一國を御取なされて。立派な御殿様にならせらる。
 様。神様の御加護を禱りて居りますと申しましたら。元就公は莞
 爾と打笑み玉ひ。汝はマー小膽の奴ではないか。何で身共が天下を
 取る事を祈りて呉ぬぞ。天下を取ふと望んで僅に一方が取れる。一
 方を取ふと望んで僅に一國が取れる一國位な小さな事を望んでは。

一郡も六ヶ敷いぞよと仰せられたとありますが。實に其通りで。捧程の事を望んで。僅に針程の事が出来るものであるから。望みはなるべく大きく持たねはなりません。就ては欲と二人連の世の中でありますから。誰でも金持になりたくないものはありますまいが。今日此多勢の参詣の中で。我は東京一の金持にならふ。日本一の金持にならふと云ふ。望を起される人がありませぬか。それは多勢の事であるから。一人や二人はあるかも知れませぬが。一層進んで我は東洋一の金持にならふ。世界無雙の大金持になり。ワンダーヒルドの上に出よふと云ふ望を起される人は。失禮ながら御座りますまい云何でありますいくら日本一の金持になつたと申した所が。身から光明放つでもなければ。膚が紫磨黄金となるでもない。矢張同ト人間でありますぞ。同ト人間仲間の一番ゑらい者になつてみよふ。な

らずはおくまいと云ふ小さな望みさへも起す甲斐性のない。意氣地なしの身の上が。今日此御別院へ参りましたは。何の爲ぞと尋ねて見れば。人間仲間のゑらい者處ではない。天上界を望むにもあらず。聲聞縁覺になりたいと云ふでもなく。菩薩の位を望むにもあらず。恐れ多い事ながら五十二段を飛び越えて。彌勒菩薩に先驅し。光明無量壽命無量彌陀同體の立身出世が致したいはつかりでありますよふ。何と不思議な事ではありませぬか。サー皆様よく考へて御覽。こんな過分な大きな望みが。小さな心に起る道理はなけれども。起らぬ望の起つたは自分の智慧や働ではありません。全く大慈大悲の阿彌陀如來。一度は助けねはおかぬ。救はねはおかぬの御念力が。至り届ひて下されたからと。喜ばねばなりません。扱て其阿彌陀如來は。如何様なる佛ぞと云ふに付て。小經金口の説を擧げ。光壽二

無量と云ふ事を。御取次に及びかけました。是が即ち攝化の大本と申して。衆生濟度の資本であります。何故なれば光明は智慧の相ぞ。一切の人の希望する處は智慧と壽命であります。夫故に其欲する所を擧げて之に就しめ玉ふのぢや。誰でも馬鹿になりたいと云ふ人もなく。又長生したいと望むのは人情であります。馬鹿になりたい人ならば。彌陀をたのむにも及ばず。天死したいならば御法を聽くにも及びませんが。智慧と壽命を欲するならば。必ず彌陀をたのまねばなりません。御法を聞く身になりますれば。聞ぬ昔とは大違ひであります聞ぬ昔は思ふても間に合す。云ふても役に立たぬ事を思ひ出し語り出し。ムシヤ。クシヤ。と。夜の目も寐すに胸を焦し。ぐらくと養ひかへる程腹がたち。云ひかけたら是でも非ても。理屈に負けたら喰付たい程に思ふたものが。妙なもので腹

立つ下から胸までおろし。嗚呼淺間しや「此ころ鏡にうつるものならば。嗚や姿のみにくかるらん」胸に眞恚の炎を燃し。心に邪見の角ふりたてた。此根性の恐しさと誤りはて。御恩の稱名喜ぶ姿の殊勝さを。法喜をうとぞのべたまふ。是が即ち信心の智慧にして光明無量觸光柔輒の御利益であります。次に壽命無量とは兼々御聽聞の通り。人間は不定の境なり。極樂は常住の國なり。人間世界は何事も。始めあれば必ず終りあり。生ある者は死に歸し盛なる者は終に衰ふ「死に嫌ひ生れて來たが無調法」生れて來たと云ふ無調法がある故に。晚かれ早かれ一度は死んで往かねばなりません。夫故にくら長生がしたいくと。神や佛に無理な願を申上たとて「延命と祈る内にも減る命」誠に死せんときは。かねてたのみおさつる妻子も財寶も一つとして我身には相添ことあるべからず。今にも無常の

風に誘はれなば。泣の涙で淋し旅立をせねばならぬが。御互の身の上でありますが。有りがたい事には無量壽佛に歸命して。眞實報士の往生を願ひ。往生一定御助け治定と。安心安堵の出来た身の上なら。臨終一念の夕べ大般涅槃を超證す。産を育てた我子をさへ愛想をつかず様に病疲れ。見る影もない此身體を脱すて。心一つは極樂淨土無量永劫の其間。病もなければ苦みもなく。死ぬるなんぞと云ふ様なそんな縁起の悪い事は夢にもない。淨國無衰變一立古今然壽は無量壽。證は無上涅槃。見るも樂み聞くも樂み。樂み揃ひの目出たい出世をさして戴く事が出来ます。是が即ち壽命無量の御徳にして。及其人民と説かせられたは此事であります。斯る廣大の功德利益を圓滿成就の御姿が。拜む大悲の親様ゆへ。大凡時の古今を問はず地の東西を論せず。云何なる英雄も云何なる豪傑も。風に草の

靡くが如く。皆悉く我もくと御信仰なされた事であります。就中前にも御咄申した。毛利家の御先祖元就公の如きは最も篤信の御方でありまして。御臨終に世子並に兩弟即ち隆元隆景元春の御三方を枕邊に御召に相成り八個條の御遺訓を御授けになりました。其第八ヶ條に。一我等十一歳土居に候ひし時。念佛の大事を授けり。當年の今に至るまで怠りなく無量壽佛に歸命し。無上功德の御名を稱ふれば後生の義は申すに及ばず。自ら今生の祈禱にも相成候事と承り候。實に一念彌陀佛即滅無量罪乃至十念の謂れ子孫に傳へて。必ず御疑ひあるべからず。是我存念に候。かく申置候事本望これに過す返すく目出度候穴賢と。仰せられてあります。毛利家代々の君臣皆悉く此御遺訓を御守に相成り。稱名念佛の聲。防長二州にみちみちて。國益々富み家益々榮々。元徳公の時代になりましては。

雜新

革命の大切により。従一位公爵に御進みに相成。昨年十二月御隠の砌には。陛下におかせられても。深く御哀悼あらせられ。特に國葬の禮を賜り。御家の面目之に過ぎたるはなく。實に目出度事と申さねばなりません。是が即ち御先祖元就公が後生の義は申すに及はず自から今生の祈禱にも相成り候と仰せられたる。御言葉の虚しからざる所であります。

第二十三席

さて壽命無量の御利益は後生にのみありて。今生にはないものかと尋ねて見ますれば。決してそふ云ふ譯ではありません。華報果報と云ふ事がありました。未來善所へ趣くものは。今生も自ら安樂な世渡が出来。未來惡所へ赴く者は。今生も自ら苦惱の日暮をせねばなりません。それ故に未來は無量壽國へ生るゝ事と定まれば。自ら今

生も息災延命の御利益はある筈であります。前席に引きまゝした元就公の御遺訓にも。後生の義は申すに及はず自から今生の祈禱にも相成申すべく候と仰せられてあります。此自らと云ふ文字は字眼と申して。至りて大切な文字であります。其故は自らとは自然天然の義で。こちらから求めざる事を顯はす文字で。若し長生がらたい南無阿彌陀佛。死にともない南無阿彌陀佛と。こちらから願ひ求めて雑修の部に陥るならば。自らとは申されません。今生の有様は過去の因縁に任せ。後生の大事は彌陀の願力に任せ奉りて。やれ嬉しやで日暮を致しますれば。求めざる現世の利益を得。長命無病の身とならるゝぞと云ふ事を。自らと仰せられたもので。菓幹喻經の中にも。後生を米に譬へ。現世を菓に喩へ。後生菩提の米を求むれば。必ずしも現生の菓は求めざるも自から得らるゝ旨を説かせられ

てある事は。兼々御聽聞の通りであります。昔く徳川家康公。御幼少の時より深く佛法に御歸依あそばさして。具足の下へは必ず五條の袈裟を掛けて出陣あらせられ。守本尊は阿彌陀如來にして黒本尊と申しまます。抹香の烟に染て黒い故に。黒本尊と申すのであるなにごと。早合點する人もあります。左様では御座いません。是は故九郎判官義經の守本尊であつた故に。九郎本尊と申すので。それが云ひ傳へ聞き傳へする内に。黒本尊と訛つたのであります。家康公或時酒宴に勞れ玉ひて。寢所に伏し玉ふに。九郎本尊枕の上に立たせ玉ひ。汝何とて今日我前に來らざるや早く來るべし。若愚圖くせば災難あるべしと。聲朗かに告たまふ。家康公喫驚はね起きて。あら勿體なや有がたやと。早速持佛堂に入らせ玉ふとて。寢間を出させたまふに。また寢間の敷居を越させざるに。床の下より明晃々

たる刃を持って蒲團を突上る。さてこそ曲者。侍ふ者來れと家臣に命トて椽の下を捜さしめ玉ふに。果して一人あり擲捕へて見るに。小四郎とて今迄傍に召仕はれた者で有た。云何なる事にて斯の如きぞと尋ねさせ玉ふに。元來甲州武田家の者にて。公を討ん爲に偽りて仕へ近付候へ共。斯く迄御運強く渡らせ玉ふに付て。武田の徵運の程口惜く候と。涙ながらに申上たれば。家康公感トさせ玉ひ。予が命をつけねろふとは。憎き奴なれ共。武田に取つては古の豫讓にも劣らぬ忠臣なり。あたら士を害せんも遺憾なり。助くべしと仰せられ。青銅一貫文下されて甲州へ歸へされたと云ふ事でありますが。此時若も九郎本尊阿彌陀如來の御告がなかつたならば。家康公の御壽は勿論なかつたに相違ありません。然れば即ち家康公が七十有餘歳の長命を持ち。四分五裂の天下を統一して。三百年の太平を開き

上は宸襟を安ト奉り。下は幾千萬の蒼生をして。鼓腹饜壤の幸福を
 得せしめ玉ひしは。皆之れ九郎本尊阿彌陀如來の御靈驗と申さねば
 なりません。是が即ち論より證據。現世利益の確な證據であります
 阿彌陀如來々化して。息災延命の爲にとて。金光明の壽量品。説き
 おき玉へる御法なり。山家の傳教大師は。國土人民をあわれみて。
 七難消滅の咒文には。南無阿彌陀佛を稱ふべし。他力の信を戴いて
 南無阿彌陀佛で日暮すれば。現世安穩後生善處。兩手に花の仕合せ
 で御座います。然る處念佛すれば死ぬる事が近づくかなんぞの様に
 考へて。縁起が悪いの不吉ぢやのと云ふて居る者が。世界には否別
 して此關東には随分あります。宛然白物と黒物とを間違へ。夜と
 晝とを間違へた様なもので。何故にこんな間違ひが起たものかと。
 たんく考へて見まするに。妙な譯が御座います。私が二十年前よ

り千辛萬苦を嘗て開教致しました。群馬縣上野國に吾妻郡と名くる
 大郡が御座います。其山奥は非常な僻地で。不開化極まる處で御
 座いまして。人民が妙な事を申します。米は縁起が悪い。米を見れ
 は不吉ぢやと申して居ります。あまりに不審に存トまして。段々調
 べて見ますれば。成程尤も至極の道理が御座います。何故と申すに
 人民の常食は。稗とか粟とかそんな無味物ばかりで。米を食する事
 は一生涯に一度しか御座いせん。それは何時かと申しますると。
 非常な大病で醫者も手を離し。逆も存命は覺束ないと云ふ場合にな
 りますると。親類縁者が寄集り。郡内の小都會たる中之條若くは原
 町へ使を立て、米を買ひ取り。それで柔な飯を焚て喰べさせます。
 米と云ふものは死ぬる時でなければ。たべられぬものと思ふて居り
 ますから。人間の壽の寶たる結構な米を見て縁起が悪いぢや不吉ぢ

やと申します。何と氣之毒な者では御座いませんか。今も恰と其通り。平生はそりや頭痛がする不動様そりや腹が痛む薬師様と。雑修の稗や粟ばかりを喰べて居りまして。南無阿彌陀佛の米の飯は死ぬる時ばかり。死んでからはかりと考へて居りますから。結構な南無阿彌陀佛が縁起が悪い様に考へられ。不吉の様に考へらるゝので御座います。奥山の人間同様に何と御恥かしい事では御座いませんか。併し乍らこんな間違つたことを考へるものは。當時ばかりでは御座いません。昔も少しはあつたと見えます。彼の徳川家四天王の隨一。江州彦根の城主井伊掃部頭は難有い信者で御座いました其家老何某は非常の御幣かつぎて。念佛は不吉ぢや風上にも置けぬと云ふ人で。或年の元日に早朝登城致し。御年賀を申上ると。掃部頭御機嫌殊にうるはしく。今日は日出度吉日なれば抹茶一服馳走い

たそふ。茶室へ通れと仰せられ。家老は難有う存ト申すと。畏りて茶室へ通りますれば。ユウ云何に爐の上には。井伊家の名器たる阿彌陀釜が掛りてあります。こりや大變ぢや元日からこんな縁起の悪い釜の中で沸したものを飲まされてはたまらぬ。御諫申せば御氣に障るかも知れぬが。併し乍ら命あつての物種ぢや。命が無ふては忠義も出来ぬと。思案を定めて我君様へ申上ります。恐ながら今日は元日で御座います。平時は兎もあれ今日は縁起の悪い阿彌陀釜で沸したものを召上つては。御家の不吉で御座りますと。顔色かへて諫むれば。掃部頭は言語を和け。こりやく身共の前では兎に角に他人の前では決してそんな馬鹿な事を云ふて呉れるな。井伊家の家老は愚な奴と人に誇られ笑はれては。汝一人の耻辱でない。全體汝は武藝に於ては。一騎當千の達人をらいる者ではあるけれども。情な

い哉學問がないから。そんな馬鹿な事を云ふのぢや。ちと學問をす
 るがよい。學問すると何事もよふ分る。此阿彌陀釜は日本一の目出
 たい品で。不吉なもので決してない。其譯知るまい語て聞かそふ。
 阿彌陀とは天竺の語で。日本通用の漢字では。無量壽となる。無量
 壽とは限りなき命と云ふ事で南無阿彌陀佛くと稱名するは南無と
 は是も天竺の語で。漢語に譯すれば歸命と云ふ語となり歸命と云ふ
 は命令に順ふと云ふ事にて。君の命親の命扱は覺りの佛けの命令に
 従ふと云ふ事なれば。此世は長命無病の幸福を得。未來は無量壽國
 に往生して。壽は無量壽證は無上涅槃。無量永劫の其間。顔に皺の
 よると云ふ事もなく。頭に白雪を頂くと云ふ事もなく。死ぬるなん
 ぞとそんな縁起の悪い事は夢にもない。見るも樂み聞くも樂み。樂
 み揃ひの御證を開かせて戴くこと佛とは覺と云ふ事覺とはさとると

云ふ事で。夜の明け九様に目の覺めた様に何事も明かになり。分ら
 ぬ事の少しもない。迷ふ事の聊もないのが覺の字のころ。こふ云
 ふ結構なお謂れが。阿彌陀の三字にこもりてあるから。目出度元日
 に阿彌陀釜をかけ。現當二世の幸福を思ひ浮べて樂しむのであると
 懇に語りたまへば。御幣かつぎの家老も大に感心致し。さては左様
 で御座いましたか。斯る廣大な御理由とも知らず。今迄は阿彌陀と
 あれば縁起が悪い。念佛は不吉ぢや杯と恐れ多いこと計り申して居
 りましたとあやまり果て。無二の信者となられたとあります。サ
 皆様南無阿彌陀佛は芽出たい御法。阿彌陀如來は目出度御佛で御座
 いまするぞ。鶴は千年龜は萬年。萬歳ぢや萬々歳ぢやと申しました
 處が。限りある命なれば。千年経ては死なにやならぬ萬年経ては死
 なにやならぬが。たのむ如來は無量壽佛。參る淨土は無量壽國。限

りなき仕合とは。さても尊とや難有や。

第二十四席

阿彌陀如來は云何なる佛ぞと云ふに付て。光壽二無量と云ふ事を引續き御取次に及びましたが。さて又蓮如様の御教化から伺ふて見ますれば。されば阿彌陀と云ふ三字をは。おさめ助け救ふとよめるいわれあるが故なりと。仰せられてあります。是が即ち淺近の言葉を以て。深遠の義理を御教化あそはす妙手段にして。淺學の私共は仲々伺ひ難い所でありますが。先輩の説には。是は空也上人の六字口傳と云ふ書物がありまして。其中に南無阿彌陀佛と書て「おさめ助け救ふとはけはかになしと」よむとあります。恐くはそれを御引用なされたものであらふ。何故に阿彌陀の三字をおさめたすけ救ふと讀むぞと云ふに。一説には惠心僧都の御釋に。阿彌陀の三字を空假

中の三諦に配當してあります。然れば則ち空諦は。萬象を包含するが故に。阿を訓トておさめと云ひ。假諦は萬法を成ト一法を泯せざるが故に。彌を訓トてたすけと云ひ。中諦は非空非假の故に。非空は假を救ひ。非假は空を救ふ故に。陀を訓トて救ふと云ふと申してあります。併し乍ら同トく先輩の説には。空也の意は兎に角。謹で蓮如様の思召を伺ひ奉るに。そんな理屈張つた事ではない。全體御文章の中に。阿彌陀佛の四文字を釋し玉ふに。三重の義がある。三重の義があるに依て。三訓を御用ゐなされたものであらふ。其三重の義とは一には攝取の義で。御文の三帖目第五通に阿彌陀佛と云ふ四の字は。南無とたのむ衆生を。阿彌陀佛の漏さず救ひ玉ふ心なり此心を即ち攝取不捨とは申すなりと。仰せられてある。是が即ち攝取の義であります。二には回向の義で四帖目第八通に。南無と衆生

が彌陀に歸命すれば。阿彌陀佛の其衆生をよくしろとめして。萬善萬行恒沙の功德を授け玉ふなり。此心すなはち阿彌陀佛即是其行と云ふこゝろなりと。是が即ち回向の義であります。三には往生の義で。三帖目第二通に。阿彌陀佛と云ふ四字は。云何なる心ぞと云へば。今の如く彌陀を一心にたのみ參らせて疑の心のなき衆生をば。必ず彌陀の御身より光明を放て照らさくして。其光の内におさめおきたまひて。扱一期の命盡ぬれば。彼の極樂淨土へ送り玉へるこゝろを。即ち阿彌陀佛とは申し奉るなりと。是が即ち往生の義であります。此の如く三重の義があるに依て。三訓を用る玉ひ。攝取の故におさむとよみ。回向の故にたすくとよむ。御一代聞書に回向とたまふと云ふは。如來の衆生を御助けを云ふなりと仰せらるゝが故に。往生の故に救ふとよむ。生死の根本を拔て法性の常樂を與ふ。

是れ救ふの義なるが故に。是がまことに難有い甚深微妙の御教化に。もて。中々一席や二席では辨ト盡くされませんが。當席に於てはたつた一口で御手渡を致しませふ。一に攝取の義とは。如來の方では逃げよふとしても逃がしはせぬぞよと仰せらるゝこと。衆生の方では逃げよふとしても。逃げられぬと落付くこと。二に回向の義とは。如來の方では佛になるべき品物は彌陀が與へる。衆生の方では佛になるべき品物は丸々御回向。三に往生の義とは。如來の方では往かれぬ奴を連れてゆくぞよ。衆生の方では往かれぬ奴が往れる。斯る不思議の御謂を。満足成就の御姿が。拜む大悲の親様ぞと。存せられたであろふぞなら。たのまにやならぬと氣張るでない。信せにやならぬとりきむでない。至心信樂已れを忘れて御助け候へと。御受の出來た其時より。光明攝取の懷住居。昨日迄も今朝までも。鬼や

惡魔の提燈持をじた者が。打て變て報謝の不行。衆生濟度の御手傳
ひとは。冥加にあまる仕合。

第二十五席

阿彌陀佛の四文字に。三重の義があると云ふ事を御取次に及びかけ
ました。其中第一に攝取の義。三帖目第五通に。阿彌陀佛と云ふ四
の字は。南無とたのむ衆生を阿彌陀佛のもらさず。救たまふころ
なり。此心を即ち攝取不捨とは申すなりと仰せられて。昔に徳大寺
の唯蓮房と云ふ人が。攝取不捨と云ふは云何なる事であるか。何
人に尋ねたら明に分るであらうか。否々佛境界の事は。唯佛與佛の
知見とあれば。何でも阿彌陀様に直々に御伺ひ申上るに如くはな
と。西京雲居寺の本尊阿彌陀如來に。祈誓をかけられた。さて七日
満ずる曉に。唯蓮坊夢の中にあり乍ら。須彌壇の周を行堂せられた

其時阿彌陀様が須彌壇を下せられ。しづく唯蓮坊に近寄せられ
あら勿體なや恐れ多やと。逃出す唯蓮坊の袖をしつかり捕へたまひ
唯蓮攝取斯の如くと仰せられた。そこで唯蓮坊はあら有がたや。扱
は攝取不捨とは逃る者を逃し玉はぬ事で御座りまするかと御受なさ
れたら。乍ち夢が覺めたとある。御一代聞書の中にも。蓮如様が攝
取不捨と云ふ事を。御教化なされるに付て。此御話を御引用あらせ
られたとあります。いかさま阿彌陀如來直々の御教化なれば。難
有く感戴せねばなりません。此御話から窺ふて見ますれば。前席に
も申しました通り。攝取不捨と云ふ事は。如來の方では逃げやふと
しても。逃がしはせぬぞよと仰せらるゝこと。衆生の方では逃げよ
ふとしても。逃げられずと落付くことより外はありません。思ひ回
して見ますれば。我等今日の日暮しは。逃ようくと逃げ仕度ばかり

りであります。斯く申しますれば。私共は逃げ仕度を致した覺へは決してありません。阿彌陀様の御袖にひとすがり。参らする計りぢやに。逃仕度計りの日暮とは云何なる故ぞと。不審に思はるゝ方もありませふが。能く考へて御覽なさい。朝から晩まで。晩から朝まで。瞋恚の煩惱が起りませんか。貪欲の煩惱が起りませんか。愚痴の煩惱が起りませんか。愚痴の煩惱は畜生の種。貪欲の煩惱は餓餓の種。瞋恚の煩惱は地獄の種。然れば則ち物の道理の分らぬ愚痴を溢しまするのが。畜生道へ逃げて往かふと。逃支度をするのである。我身はよかれ人は悪かれ。惜や欲やの日暮は。餓餓道へ逃げて往ふと逃支度をするのである。己れ憎やと小さき事にも腹を立て。目に角立て、睨み付くるは。地獄道へ逃ようくと。逃支度をするのであるが。併し乍ら各々方いくら逃けても駄目でありませぬぞ

貪欲の煩惱で逃げ出さんとすれば。清淨光の御守りあり。瞋恚の煩惱で逃出さんとすれば。歡喜光の御守りあり。愚痴の煩惱で逃出さんとすれば。智恵光の御守りあり。故に如來の誓願を信じて。一念の疑心なきときは。云何に地獄に落とと思ふとも。彌陀如來の攝取の光明におさめとられ参らせたらん身は。我はからいにて地獄へも落ずして。極樂へ参るべき身なるが故なり。たのむ一念の其時より光明攝取の懷住居。有漏の穢身は變らねど。心は淨土に住み遊ぶ身の上なら。設ひ淨土が嫌ひになり。今一度地獄へ逃出して。炎の中を苦んで見たり。餓餓道へ逃出して。ひもとい思ひがしてみたいと願ふたとても。攝取不捨の御力のある限りは。三塗へは返へさぬぞよとの御慈悲。

第二十六席

さて第二に回向の義。四帖目第八通に南無と衆生が彌陀に歸命すれ
 ば。阿彌陀佛の其衆生をよくしろしめして。萬善萬行恒沙の功德を
 授け玉ふなり。この心即ち阿彌陀佛即是其行と云ふこゝろなりと仰
 せられて。是が御當流では肝要中の肝要。惡人女人が世話いらす。
 易く佛になられるは。是の回向の御働さであります。回向とは回施
 趣向の義で凡夫の方へ差向けて。施して下さるゝ事。何を施して下
 さるゝぞと云ふに。若因若果。一事として阿彌陀如來の清淨願心の
 回向成就し玉ふ所にあらざることなし。極樂參りの道具立ても。
 參らして戴く極樂も。丸々私へ下されものぢやとある。兼々御聽聞
 の通り。往生大悲の親様が。因位の御修行の其時に。毒の中にも幾
 千劫。炎の中にも幾萬劫。難作能作の御苦勞は。彼尊の爲には更々
 ない。三塗苦難永く閉ぢ。但有自然快樂音。見るも樂み聞も樂み。

樂み揃ひの御淨土を建立して。可愛子供に樂がさせたいは親の親切
 かるがゆゑに念佛の行者名號を聞かば。あはゝや我往生は成就しに
 けり。十方の衆生往生せずは正覺取らトと。誓ひ玉ひし法藏菩薩の
 正覺の果名なるが故にと思ふべし。又極樂と云ふ名を聞かば。あは
 早我往生すべき所を成就し玉ひけり。衆生往生せずは正覺取らトと
 誓ひ玉ひし。法藏比丘の成就し玉へる極樂よと思ふべしと仰せらる
 彼の越中富山賣藥屋の話でありまゝたが。藥屋の事なれば諸國の得
 意先を回るに。去る處に立派な普請が出来る。其日は棟上と見わた
 多勢の人が集り。歌を謡て囃立て大な棟木を上げて居る。殊の外の
 賑ひ。處が其傍に一人の娘が其棟上を見て。ほろりくと涙を溢し
 て泣て居る。そこで右の藥屋が其娘に向ひ。此賑かな棟上を見て。
 御前さん何故泣て御座ると尋ねると右の娘は涙をふきく。ハイ私

は永々病氣の末片足引つりて。生れもつかぬ跛者になり。兩手は揃ふてあり乍ら。兩足揃はぬ片輪者。ぢやに依てお父様やお母様が。明暮私を苦に病で。迎も其身では嫁入して。ごふこふと云ふ事も出来まい一層樂々隠居して一生暮す氣はないかと。様々の御親切。それより私の隠居所を立て遣ふとて。材木を調へ普請にかゝり。今日は棟上で御座います。就ては此間お父様が山へ材木を伐に行て。大きな怪我をなされてより。永々煩ふていらつとやつたが。今日は隠居所の棟上ぢやとて。寐屋を離れて普請の手傳。私の普請が出来るとて。御身の怪我を打忘れ。跛引きく聲張上げ。歌を謡ふて勢よく。成されて下さる御姿を。見て居る嬉しさ。御胸痛めた其上に怪我までさしたも私故。それを忘れてあの勢よく。跛引きく御手傳ひ。思へばく勿體ない。涙ながらに物語したとある。サ御

同行聞ふぞや。片輪娘とは御座の吾等。跛どころか無願無行の腰拔に。かゝりきりての御心配。九方の浄土はあるけれども。永不成佛と見離され。無有出離之縁とあるからは。貰ひてのない我々を。後生の行末案ト玉ひ。一層浄土を別説に拵へて。永劫の樂みを與へんと。二百一十億の其中から。惡さを捨て善さを取り。粗を捨て妙を取り。梅の香を櫻の花に持せ柳の枝に咲せた如く。善盡と美盡とよいこと揃ひに拵て下されたが。西方浄土の新築ぢや。こゝを曇鸞大師は論註に。安樂は之れ菩薩の慈悲正觀の由より生ず。如來神力本願の所建なりと仰せらる。往生浄土の正因は願と行とを揃へ上げ卑下も遠慮もない様に。ごふこふしての御思案が。永の五劫の御心配永劫修行の御骨折が。足を怪我する處ぢやない。炎の中や毒の中。多百千劫御苦勞ありて。愈成就の棟上に。五劫永劫のつらさ

を忘れ。サー出来たぞやと。大音宣布一切世界正覺の御聲張上げて呼で下さる親様と。存せられたが誠なら。御苦勞大悲の御姿を拜み上げては。やれ嬉しや南無阿彌陀佛。

第二十七席

回向と云ふ事は何の宗旨でも用ゆる名目なれ共。餘門餘宗の回向と我眞宗の回向とは大違ひで。餘門餘宗の回向は。凡夫の方の善根功德を佛の方へ差上て。菩提を求むる狭善趣求の自力回向。今御當流の回向は左様では御座いません。如來の方からの御回向ゆゑ。凡夫の方からは不回向ぢや。阿彌陀如來の因中に於て。我等凡夫の往生の行を定め玉ふとき。凡夫のなす處の回向は自力なるが故に。成就しがたきに依て。阿彌陀如來の凡夫の爲に御辛勞ありて。此回向を吾等に與へんが爲に。回向成就し玉ひて。一念南無と歸命する處に

て。此回向を我等凡夫に與へしとすなり。故に凡夫の方よりなさぬ回向なるが故に。是を以て如來の回向をば。行者の方よりは不回向とは申すなり。造作苦勞は彌陀がして。功德利益は衆生にやる。走るが商賣の飛脚の息子に壁が出来た。サー親は大心配で。有り餘た資産ではなし。やうく人の用事を聞て走り回り。僅の賃錢貰ふて妻子を養ひ。さふぞこふぞ日を送つて居る處に。足腰たぬ壁の小悴。逆も己の跡ついで飛脚はならぬと云ふて。何ぞ商賣をさそふにも資本はなし。さふすればよかるふと。心配するのが五劫の思惟肝腎の小悴は己の身の片輪さへ片輪と知らず。亂暴計云ふて居る。後生とも未來とも心配とも苦勞とも。何とも知らぬ昔から。先へ回つて親が心配。如何考へても仕方がない。此上は己が働ひて辛抱して食たい物をくわぬ様。着たい物も着ぬ様に。儲けて貯て田地でも

貸屋でも買て置くより仕方はない。サ一それから夜も晝も命かぎり根かぎり働ひて。三錢五錢と積立て。何ほにしたらそれ程になつたら。田地でも貸家でも買て置て。我子の爲と親切なものぢや。肝腎の小悴はまた夢中の間から。五錢七錢と積立て。五年七年する内に妙なもの。塵が積りて山となる餘程の金を拵けた。幸ひ田地とか貸屋とか。三人五人が食ふて行かれる丈の物を買取り。地券戸券が我手に這入り。やれこれこれこそ。己が何時死んでも悴が行末はもう樂ぢやと。見とめた處が大悲満足。五劫が間の御思案に。如何考へても工夫しても。修行は出來ず戒行はならず。もふ此上は彌陀の手元を働ひて。與へてやるより仕方がないと。それより兆載永々劫。炎にやかれ湯玉に煮られ。難作能作積功累徳。一願起しては此れも悪人。一行修しては是れも女人と。功を積み徳を累ね令諸

衆生功德成就と。とふく成就とおふせて。サ一出來たぞよく。これこそ汝がいよく佛になれると。見留めをつけて下さつたが大悲満足の御姿ぢや。處で今の躰の小悴十四五にもなるとそろく氣がつく隣の息子と私や同年。隣の息子は最早一人前の仕事が出来ると。私はまた足が立たぬとは。さふでも己は躰と見ゆる。親は飛脚が渡世なら。夜から晝へ走るが商賣。迎も躰で此跡は相續して行く事が出來ぬ。若しや親が死なれたら。末はさふしてと思ひ出すとサ一心配。涙こぼしてほろく泣かけたのが。漸々後生が苦になりかけたのぢや。それを見て父親が悴よ何を泣く。ハイ御父様私や今日迄浮かくと知らずに暮して居りましたが。夜晝走る飛脚の子に足腰たぬ此躰。若や御前が死なれたら。後はさふして行ふかと思ふと。胸がせまりて涙がと云ひかけると。こりや悴心配すな。そ

ちが躰を躰と知らず。夢中で居る間から親は躰と見抜ひた故。汗や油で働ひて。三錢五錢と積立て、田地も貸家も買ためて。買ふた地券戸券はこれ爰に。これさへあつたら大丈夫心配するな。是が誠の興へどき。宿善開發一念發起。息子の方に造作はない。親の實意を聞く計り。乞食も出来ぬ腰拔を。苦しめて親は憂き身をやつし。汗や油で働ひて田地も貸屋も調へて。此腰拔の見留めを付て興へ下さる地券戸券。親なればこそと押し戴ひて喜ぶばかり。後生とも未來とも知らぬ昔の我等が様な。修行戒行の足腰も立たぬ此身であり乍ら。浮かゝ暮した頑是なし。夢中で暮す其内に。隣の叔母さんが死んだけな。向の叔父さんが死んだけな。私も思へば同じどし。若しや死んだら未來はど。案卜る處がよふゝ躰が知れたのぢや。サ一虎列刺病ぢや。望扶斯ぢや。彼處にも死ぬ。此處にも倒れる。捨

て置れぬ後生の大事と。胸はどきどき心配して。泣々出て來た此奴に。案卜るな苦に病むな修行の出来ぬ腰拔は。元より承知の此彌陀が。火の中苦の中毒の中。そちの後生にかゝり果て。大願起し大行修し。令諸衆生功德成就と調へ上た南無阿彌陀佛。往還二種の回向をは。巻て收めた地券戸券。サ一やるぞよと。親の誠の其儘を聞くなり信するなり。やれゝ嬉しや難有や。親なればこそ五劫永劫の憂い苦勞。此奴にかゝつて浮身をやつし。願行成就の一句の尊號。阿彌陀至徳の御名とある。南無阿彌陀佛と聞て見りや。押戴いて喜ぶを大に所聞を慶喜せん。扱父親の親切で永い間の御苦勞から。貰ふた資産と心得て。無益の費をなさざる様。大切に相續して。子に譲り孫に譲りしてゆかねはならぬ。五劫永劫の汗と油のかたまりの南無阿彌陀佛と心得て。子にも傳へ孫にも傳へ相續せよが。還相回

向の御仕組。

第二十八席

引續て回向の義を御取次に及ぶ事でありませう。全體斯様に繰返し
卷返し聽聞に及ぶは。各方を學者にらよふとの事ではない。彌陀
を信するに就て。彼尊の御名前の上にも斯様に。甚深微妙の御由來
がある事を聞く一つで。一文不知の尼入道に至るまで。容易く貫ふ
事の出來ると云ふ不思議の佛智を知らそふ爲ぢや程に。愈大切に戴
かねばならぬ事でありませう。前にも申す如く無願無行の泥凡夫が。
此機の儘で世話いらす。易く佛になられるのは。此他力回向の御働
きであります。高祖大師の立教開宗。浄土眞宗を開かせられた思召
も。他力回向の深義を述させらるゝより外はない。「謹案浄土眞宗
有二種回向。一者往相。二者還相。」往相とは往生浄土の相狀。還相と

は還來穢國の相狀。往相の回向と説く事は。彌陀の方便ときいたり
悲願の心行らしむれば。生死即ち涅槃なり。還相の回向とくこと
は。利他教化の果をらしめ。すなはち諸有に回入して。普賢の徳を
修するなり。浄土へ參るが往相。娑婆へかへるが還相。自身が參る
が往相回向。孫子の濟度が還相回向此等の回向に至る迄。大悲の手
元に成就して。與へてやらうが彌陀の御慈悲。説て聞かせてやりた
いとて。忍界教主の釋尊は。娑婆往來八千返。三國七高僧の御出
世も。一宗開闢の御開山。滿九十年が其間。草鞋竹杖の御苦勞も代
々相承の善知識。朝な夕な御化導も。唯此回向を戴かせて。やれ
嬉しやと樂む顔が見たいはつかりぢや。昔は東海道由井の宿に於て
七十有餘の老婆が旅裝束のなりて倒れて居る。宿の者が集りて醫者
よ薬よと介抱すれども。さふも薬の利目がみらぬ。逆も養生叶ぬ様

子。そこで宿の者共が何か欲しい物はないか。何なりとも遠慮はいらぬと。親切に尋ねれば。老婆が申しますには。別に何も望はありませんが。さふか乳を一口吞てみたいと云へは。宿の者共は之を聞いて笑ふて居る計りて。誰か飲してやろふと云ふ者がな。處が此事を聞いて庄屋殿が。嗚呼可愛想に何處の老婆さんか知らぬとも。七十有餘の老人が乳が呑みたいと云ふ様子たか。さふで養生の叶はぬ大病末期の望を叶へてやりたいと。女房に向ひ。これ聞けば。行倒の病人が乳が呑みたいの望ぢやそふな。其方吞ましてやる氣はないかと云はれると。流石庄屋の内儀丈で。直に承知して夜更けてから。往て吞してやりませふと云はれた處で。其夜庄屋が内儀を連れて。病人の寐て居る小屋へ往て老婆の傍に近寄り。これ旅人私は此宿の庄屋トやが。何處の人は知らぬとも。知らぬ處で行倒れ無難儀であ

ろふ。就ては乳の望ぢやそふなが。私が女房を連れて來た。サ誰も來ぬ内。たつふりと吞たがよいぞやと。庄屋の親切に。病人は兩手を合せ難有存トます。檀那樣知らぬ旅路で計らずも此大病。いかい御世話になりまする。私は江戸の者で御座いますが。若い時に夫に別れ。たつた一人の男の子。我手一つで育てあげ。十六七から都に登せ。或御店へ奉公させ。最早今年三十歳。御主人の御引立を今度別家致した故。早ふ上りて來いと書狀。それ故家も諸道具も賣拂ふて腰に付遙々上る道すがら圖らずも此病氣。已れやれ這ふてなりとも。いさつてなりとも。悴に逢ふて此金を儘に手渡しせんもの。心は矢竹にはやれども。自由叶はぬ此大病。種々と思へども。氣意ろ知らぬ人様に。明て云はれぬ三百兩。慈悲ある人があるならば。何卒たのんで此金を悴に届けて貰いたい。それ故よしない乳の

望み。吞ましてやろうとの御親切承はる上は。何卒此金悴の元へ御届けなされて下されませ。是れ計りが御願ひで御座りますと。聞て庄屋はムムすりや金が我子にやりたいとて。それと云はずに乳の望み。イヤ分りました待たつしやれ。届けてやるは易けれど。何分金の事なれば。別に證據人がなけねばならぬ。一兩人呼で來ると。それから近所の者を起して來て。サー老婆さん近所の人を二三人。證據の爲に連れて來た。シテ息子の居所は京都は何町何丁目と。住所姓名書留めて。明日とはまた今より直く京都へ飛脚を立て、やり。息子を爰へ呼で來る。壽命があつたら對面さしやう。若や命がなかつたら。私が慥に息子の手に此金は渡すぞや。安心せられよとの庄屋の親切に。老婆は泣々兩手を合せ。難有ふ存トます。其御言葉を聞く上は。都に上りて悴の手に渡した様に思ひますと。言ひぬ

終らす息は絶ゆ。直様京都へ飛脚を立て、息子を呼寄せ葬式の世話までしたとあります。サー同行衆息子に諭へたは御座の我等。母親とは阿彌陀如來。久遠實成の資産を叩き潰して。法藏比丘難作能作の御苦勞は。我等にやりたい親の親切。腰に付たる情の金とは。令諸衆生功德成就。出來た其儘與へんと。久遠實成阿彌陀佛。五濁の凡愚をあわれみて。釋迦牟尼佛と示してぞ。中天竺の伽耶城まで御出まじなされた旅の空。老婆から受取息子に渡す庄屋と云ふは誰なるぞ。恐れながら一宗開闢の御開山。發願回向の賜を我等に與へまします故に。過去未來現在の三世の業障消滅して。正定不退の立身出世。捨た諸佛の眞中で。大手ひろけて大般涅槃と。存せられたが誠なら親の情の三百兩願行成就の南無阿彌陀佛押し戴いてやれ嬉しやと。喜びく日暮が肝要。

第二十九席

阿彌陀佛の四文字に。三重の義がある中初の二義は辨ト終り。第三に往生の義。三帖目第二通に阿彌陀佛と云ふ四字は。云何なることろぞと云へは。今の如く彌陀を一心にたのみ參らせて。疑の心のなき衆生をば。必ず彌陀の御身より光明を放て照らましくして。其光の中におさめおきたまひて。さて一期の命つさぬれば。彼の極樂淨土へ送り玉へることを即ち阿彌陀佛とは申し奉るなりと仰せられて。全體凡夫が報土に往生するの。煩惱を斷せずして涅槃を得ると云ふ事は。別途不共の大事で。他宗他門の人には。話もならぬ程の事でありませす。依て此義は當流一途の所談なるものなり。他流の人に對して。斯の如く沙汰あるべからざるものなりと。御示あらせられた。御門徒の面々は座毎く〜に聽聞して居るので。其答の事の

様に思ふて居るけれ共。他宗他門の御方などは。思ふて見やとやる事もならぬ大事であります。是に依て昔唐土におさましては。天台ちやの淨影ちやの慈恩ちやのと。夥多の大徳方が力を盡して。淨土の經文を御講釋なされたけれ共。此等の學者は皆悉く道理成佛の法相に執着して。自力の計ひがすたらず。別途不共の願力と云ふ事が分りませんから。畢竟盲目の籠のぞきで。或は極樂世界は應身應土と云ふて。至りて位の低い淨土ちや。それ故に凡夫が往生出来るのであると云ふて見たり。或はいや左様ではない。極樂は報佛報土と云ふて。至りて位の高い御淨土ちや。それ故に往生する人は。皆悉く地上の大菩薩であり。凡夫女人は影現きもならぬなと云ふて見たり。種々と飛んだ間違ひを言觸し。一盲衆盲を導いて滔々たる天下我もくと。邪見の穴へ落込んで。阿鼻焦熱の炎に焼かれ。多

却衆苦に沈まにやならぬ有様を。御覽なさるゝ親様は。哀れ不愍と
 思召。これや大變ぢや抛てはおけぬと。大心海より化してこそ。善
 導和尚とおはしけれ末代濁世の爲にとて十方諸佛を證據に立て。古
 今楷定の御判釋あらせられ。極樂淨土は報佛報土。參る衆生は五乘
 齊入。上は等覺補處の大士より。下は一文不知の尼入道に至るまで
 雜行捨て彌陀をたのむ計りぞ。參る淨土は報法高妙。十方世界に並
 びのない。見るも樂み聞くも樂み。樂み揃ひの極樂ぢやぞよ。問曰
 彼佛及土既言報者報法高妙小聖難階垢障凡夫云何得入。答曰若論
 衆生垢障實難欣趣正由托佛願以作強緣致使五乘齊入。是に
 就て難有い御話がある。昔法然聖人淨土門御開闢につき。南都北嶺
 の妬に依て御流罪となり。讚岐國鹽飽の庄に御化導の砌。道俗男女
 大に歸依をなす。中にも九條殿の代官鹽飽權守時遠入道西忍と云ふ

人。明暮御教化を蒙むりて。深く御法義を喜ばれました。さて聖人
 は遂に勅勘御免となり。都をさして御上りに付。夥多の同行は御名
 残を惜み。西忍もろ共御船まで御見送申上られ。其時西忍涙乍ら聖
 人へ申上らるゝには。御一生御傍に居て御供養申上げ。御教化を蒙
 らんものと。こればつかりを樂みに致して居りましたに。此度都へ
 御歸りと相成れば。此が今生の御暇乞かと。大音上て泣叫はる。其
 時聖人も涙乍ら會者定離は娑婆のならひ。儘にならぬが浮世ぢやが
 念佛喜ぶ仕合には。未來は淨土で二度の對面。やがて入道殿逢ひま
 しよふぞや。併し何か御尋なされたい事はないかとの仰せに。ハイ
 豫て御聞せを被れば。更に疑ひは御座いませんが。是が今生の御暇
 と存トますれば。不圖不審が起りましたと申しまするは。餘り此機
 か拙いのに。參る淨土が結構主極。思ふて見れば餘りの事ぞと申上

ると。元祖聖人入道殿往けませぬぞ参られませぬぞ。貴殿も往けぬ
 我も参れぬ。是はしたり聖人様。只今となりてから参られぬとは。
 いかさま貴殿も往けぬ我も参られぬ。ちやが入道殿よく聞玉へ。此
 法然は無住無官墨の衣に墨の袈裟。陛下の御前へ憚あり。中々行か
 れる身ではない。然るに先年恐乍ら勅命を蒙り。攝政關白公家大臣
 夥多列座の其中で。而も此法然が上座に直り。陛下に圓頓一乘の戒
 法を御授け申した事がある。墨衣の法然が往かれる身ではなけれ
 ば。来いよの勅命一つの仰に。西忍入道は横手を拍ちやれ〜難有
 や。こんなさま抱へ乍らで。往く積りて居りました故。往かれまい
 かと疑ふたり。参られまいかと危ぶんだり。あゝのこうのと案トま
 した。往けぬは必定参られぬは當前。往けぬ此機の往かれるは。参
 らすぞよの勅命一つ。難有う存トますと。大音上て喜ばれたとある

サ一御同行衆分りましたか。此機を問へば極悪最下々輩下行下根人
 下劣底下の下主凡夫。下の字揃ひの此奴が。無上の佛國に往生して
 無上涅槃の御證を開く道理はなけれども。往けぬ浄土へ往かれるは
 来いよと呼で下さる。勅命一つ。来いよの聲は彌陀の招喚。往けよ
 の御意は釋迦の發遣。来いよの聲に呼立てられ。往けよの御意にす
 められ。来いと往けとの板挟み。ノツピキさせぬ釘かすがい。御
 慈悲のくさびに止めあけられ。至心信樂己を忘れ。無行不成の願海
 に歸し。斯る機迄も此儘ながらの御救ひとはと。大切に聽聞が肝要

第三十席

御互に御法聽聞の因縁が熟して。日々賑はしく参詣恭敬の足手をは
 こび。見佛聞法の勝縁に値ひ奉りても。此因縁が和合せぬ時は。何
 の所詮もありませんから。能く〜大切に聽聞が肝要であります。

大切に聽聞が肝要ぢやと。いくら拙僧が御勸め致しても。各々方に
 聽聞の必要と云ふ事が知れませねは。驚きの念の起らふ筈はありま
 せん。總て世の中には流行物と必要物の二があります。假令へは
 着物の縞模様と云ふ如きは流行物であります。イヤ此節は茶縞が流
 行るとか。藍縞が流行るとか。又は千筋とか萬筋とか。此等は皆流
 行物でありますから。有ても無くても求めても求ひても濟みます
 設ひ茶縞の流行る時分に。藍縞を着て出やふが。小紋の流行る時分
 に。縞の着物では人中へ恥かしくして。出られぬと云ふ事はありま
 すまい。併し夏は單物。冬は綿入と云ふ如きは。流行物ではありま
 すまい。是は必要物でせふ。人が單物を着るから。私も單物と云ふ
 様に人眞似をするのではありますまい。人が着やうが着まいが。人
 の手前を見るのでもなく。眞似をするのでもありますまい。夏は暑

いから單物。冬は寒いから綿入を着るので見りや。無ければないと
 云ふて濟まされるものでは御座いますまい。若し夏になりて單物が
 なければ。綿入を解いてゞも。單物にせねばならず。冬になりて綿
 入がなければ。單衣を合せ綿を入れても。綿入にしないではいけま
 すまい。是と同じく。いや此節は天理教がはやるとか。蓮門教が流行
 するとか。世には流行神とか。はやり佛とか云ふものがあります。
 そんな流行物は。一時は非常な繁昌になりましたも。おひく衰へ
 て。跡で目が醒めて見ると。馬鹿くしい事が澤山あるものであり
 ます。今御互が聽聞する處の他力の信心は。左様なものではありま
 せん。金剛堅固と作らせられて。益々信心の光輝が顯はれるもので
 あります。自力の信心は伏見人形の如く。一時はなかなか立派にあ
 りますが。追々熱心の艶がはげ。見る影もないやうになります。他

力の信心は純金無垢の人形の如く。持ては持つ程光輝を増し。其身一人の仕合のみではありません。家内眷屬に至るまで其徳が及びまして。和合の花が咲くやら。幸福の實がのるやら。稻がよく出来れば藁まで能く取れると云ふ有様で。終には天下國家にまで。信心の徳が及ぶ様になりてまいります。それが即ち名號六字の働さであります。乃て是の阿彌陀如來と申す佛さまは。流行佛様ではありますまい。必要な佛様であります。丁度夏は單物冬は綿入の必要なる如く。我等凡夫の出離生死の一大事に取ては。恒沙塵數の佛があつても。諸天善神が御座つても。惡人其儘出て來いよ。女人其機のなりて助くる佛様は。三世に一體恒沙に一佛。阿彌陀如來の外にはありません。此處を御懇に御諭し下されてあるが蓮如上人の御化導ぢや此味を味ふて見れば。御婢さんに勧められて參るでもなく。叔母さ

んが八ヶ間敷云はるゝからでもなく。隣の嫁さんが大切になさるか。向ひの檀那が喜ばるからと。名聞人眞似の風情に。參詣するのにはありませんぞ。人は兎もあれ角もあれ。私一人の往生を苦に病んで下さるゝ。大悲の御手元一つを當にして。露聊かも疑ひなく。たのむ者を救ふとある。不思議の願力に任せ奉り。稱名諸共に日暮の出来る身の上とならりようぞなら。生れ難い人界に生を受た所詮であります。

第三十一席

偕て廣い世界を見渡しますると。兎角御法義を聽聞し。御寺參りをするは。浄土眞宗に御流れを汲んだ役目の様に心得る方が多くあります。そんなにおい考では。なか／＼出離生死の埒はあきません。御寺參りとか御法聽聞とかは。何も眞宗門徒であるからではあります

すまい。生れ難い人界に生を受け。萬物の靈長となつた所詮には。形而下の御世話と。形而上の御世話にあづからいではすまぬのであります。形而下とは此身の上にあらはるゝ處の世話で。則ち政事のことでもあります。形而上とは姿形ちにあらはれざる。心の内の世話であります。此心の世話と云ふ事は。どふしても宗教の力でなければ。出来ない事で。互に信愛して居る夫婦の中でも。夫の心に今何を案トて居るやら。女房が云何な考へをしておるやら分りますまい又産た親でも分らぬは心の中でありませす。讀書とか算術とか云ふ様な。形の上にあらはるゝ教育なら。誰でも出来ますが。見ない心の内の事になりましては。其一分は兎も角も。完全なる教育は凡夫仲間の力には及びませすまい。他人の力どころではない。善を善とし。惡を惡とし。能く善惡の分別をなし。我身を我身を抑へて見ても抑

ゆる事が出来ず。たまゝ善心を勵まして見ても。すんゝ進むと云ふ事は中々難い事でありませす。こんな事は思ふまい。あんな事は歎くまいと。心て心を異見しても。容易に承知はしませすまい。嗚呼夜の短いにこんな馬鹿くゝしい事を案しても。六日の菖蒲十日の菊何の役にも立たない事。こんな事はすつかり忘れ。夜は早く寐て朝起きしやうと思ふて見ても。寐られもせず。ランプを消したら寐られやふかと思ふて吹消して見ても。眼はパチパチして愚痴計りが溢るゝ。淺間敷凡夫ではありませぬか。心に及ばぬものはなにかあると。心に問へは心なりけり。自分の心すら自分の心に任せぬ浮世でありながら。イヤ女房が思ふ様にないとか。亭主がいけないとか朝から晩までくよくよ云ふたり思ふたりとは。さてく情ない事ではありませんか。此情ない心中を哀はれ不愍と思召。五劫永劫の年

月重ね。積功累徳あらせられ。御成就なさつたが六字の名號。此名號の不思議を以て。斯る煩惱の病を癒し。轉惡成善の利益を與へ。今生後生二世かけて。安樂無事の身の上。御育てなご下さるゝが眞宗二諦の教育であります。其眞宗の御本尊たる。阿彌陀如來と申す佛様は。何も眞宗一流の取切の御本尊ではありません。法界の衆生を一日に詠めさせられ。早かれ遅かれ一度は助けにや置かぬ。救はにやおかぬと。超世の大願を起させられ。一切恐懼爲作大安。苦しみなやむ此奴を。樂しみの身にしてやりたいと彼尊の正覺をかけたものにして。凡夫の往生を御成就の曉より。待て居るぞ〜と朝な夕な喚づめて呼て下さるゝ其呼聲が。取も直さず南無阿彌陀佛と云ふ六字であります。其六字の謂れを聽聞し。出離の大事を安心するには。家は禪宗でも眞言でも。先祖の佛事供養は天台としても

家でもさる宗旨でもなく。葬式法事でもさる往生でもありません。宗は主なり尊なりとあつて。我身〜の胸の内に。助かる御法が明かに信せられ。金剛堅固の行者となり。心廣く體胖に。未來の佛果を期する仕合を得られてこそ。人の人たる果報を完ふすると申すものであります。其助かる御法とは外ではない。末代濁世の造惡不善の身ながら。極樂の往生を遂ぐると云ふ。易行他力の法門は。天にも地にも只一つ。阿彌陀如來の御慈悲に限りません。其御慈悲のほどを懇慫に御化導なご下され。云何なる愚痴無智の徒ら者も。安々聽聞のなるが則ち蓮如上人御形見の領解文。

第三十一席

我等が今度の一大事の後生。生死事大無常迅速と御意あらせられて世の中に何が大切と申しましても。生死の境程大切な事は御座いま

せん。極樂と常樂。悟ると迷ふとの關所であります。其生死の關所に何時かゝるか申しますれば。無常迅速とありまして。只今も知れませんが「さためなき世にも若きはたのみなり。兎にも角にも老の身ぞうき」と俊成卿は申されましても。なか／＼若いと云ふがたのみになりません。あてにもなりません。「兎に角に老はあまたの年を経ぬ。定めなき世よ若き身ぞうき」と定家卿の仰せらるゝ如く。何と云ふても老人は。五十年も六十年も。浮世の日暮をして見れば。永い月日の其間には。花鳥風月の遊びにも交り。隅田川に棹して花見歸りのほろ酔に。榮花の夢を結た事もあり。箱根や伊香保の温泉に。烈しき夏の暑さを忘れ。思ひぞ積る圓山に今朝も来て見る雪見酒。上野の櫻に孫子を連れ。鬱さを晴した事もあるふが。今を盛りの一八二九。花にもまざる乙女子も。無常の風にさそはれては。獨

生獨死獨去獨來。親や夫に先立て。死出の旅路に只一人。果敢ない我身と氣が付かは。たのむべきは彌陀如來。信心決定して參るべきは安養の淨土であります。「野邊みれば知らぬ煙の今日もたつ。あすの薪はたが身なるらん」昨日見し人はいかにと今日問へは。谷ふく嵐峯の松風「流水生涯盡。浮雲世事空。設ひまた世になからへて居るにもせよ。上壽百歳。中壽八十。下壽六十。此間除病瘦喪死憂患。開口而笑者一月之中。不遇四五日而已矣と。三陸の海嘯。濃尾の震災。盤梯山の噴火。秋田の洪水。聞く度ごとく。同胞の慘狀を思ひやり。聊かなりとも義捐して。慰めたいものであると。我も人も心配でせう。況や近き一族が火事盜難にかゝるやう。或は貰ふた花嫁が産後の惱みで床につき。生れた子供が煩ふとか。年が善いとか悪いとか。辛勞苦勞のひまと云ふては。中々少いもので。眉を

開いての喜びは。幾度もない世の中に。信決定の身の上は。善悪苦
 樂が御縁となり。報謝の稱名を相續し。喜び勇んでの日暮しとは。
 何たる我身の仕合ぞと。仰ぎ上げては南無阿彌陀佛「櫻花散ら梢に
 蟬なきて。菊の枯枝に白雪をふる」一年の間には春夏秋冬のある如
 く。榮枯昇沈は浮世の常。設ひ一時幸福がありましても「行末の身
 の幸あらんおりくも。世の常なきを思ひわするな」必ずく油斷
 としてはいけません「いつしかに今年もくれてこととはと。思ひし年
 もいたづらにして」今年くと思ふ内に。何時の間にかは年老のつ
 もるらんとも。覺はず知らざりさと。御歎きあらせられてあります
 全體無常とさへいへは。何時でも死ぬる事のみ様に。考へて居る
 人計りであるが。兎角無常と云ふ事を。縁起の悪いものとのみ思ふ
 てなりません。佛様は諸行無常と御説き遊ばして。世の中の事はい

も無常ならざるものはないから。油斷をするなど御誠めあらせられ
 てあります。實にそふぞとやう。逢ふたものは別れるし。有るもの
 は無くなるし。盛なるものは衰ふるし。若い者は年がよるし。嬉し
 いと思へば悲しふなるし。生れたと云へば死ぬると云ふ事は。上で
 も下でものがるゝ事は出来ません。乃で第一無常と云ふ事を心得ま
 すと。有る時に無くなるといふ考へを持ちますから。如何に今日が
 富貴なくらしを致しましても。貧賤なものを侮るといふ事もなく
 金錢を湯水の様に使ひもせず。仕合が善いからと云ふて。威張るで
 もなし。悪るひからと云ふて。愚痴も起らず。富貴に素しては富貴
 に行ひ。貧賤に素しては貧賤に行ふと云ふ。世に所謂天命に安んず
 る料簡になりますから。手のひらをかへすよふな。烈しい無常はの
 がれます。又設ひいか様な事に出逢ひましても。周章たへる事は御

座いません。凡ての無常に注意しまして。御法義を大切に聴聞し。信心堅固の人になつて。世の中を渡りますれば。人と争ひも出来ず馬鹿も致しません。夫婦兄弟の間は勿論。社交上にも風波の起ると云ふ事は御座いません。況や無常の中の大無常たる。生死のさかいに臨みまして。七轉八倒の大騒ぎで。三惡道の古巢へ後戻りする様な。宿なし連の仲間を離れまして。阿彌陀如來の攝取の光明につまされ。菩薩聖衆の仲間入となり。假令さかさま事の不幸に際し。娑婆の御縁の盡る時にのぞみましても。稱名諸共心靜かに。親にも子にも夫にも左様ならば。私は御先へ淨土へ参ります。御兩親を看護致し。御見立せねはならぬ身なるに。却て御世話になるのみならず乳呑子までも跡に残し。御老人に心配かけ。すまない事で御座いますと。涙ながらに二親に兩手をついて詫るやら。連れ添ふ夫の手を

とつては。年の行かない其時に。此家の内にからづいて。手習算盤縫針から。女の凡ての教育に幾多の造作をかけまして。漸く世間の人並にならして貰ふた御蔭には。是から尊家の手助に少くはならふと思ふたに。其甲斐もなく此大病。うけた御恩を報トもせず。御身ひとりに厄介な三人迄の子を残し。死出の旅路に立ちますも。因縁事と諦めて御堪忍を願ひますと。詫ひる脇には姉娘。頑はない子を膝にあけ。涙ながらにノ一母様。此兒の事や私の事。そふ仰しやらいでも御胸の中御察し申上ますれば。さぞ御悲ふ御座りませふが。此年月の御教育及ばす乍ら私が。祖父様や祖母様の朝夕調度の御世話から。弟や此兒の教育は。及ぶ限りの力を盡し。父上様に御苦勞のかゝらぬ様に致します。必ず御案トなさらずに常平生に御聴聞の御慈悲一つを相續し。近付く淨土の往生を御待ちになるが肝要と。

聞く母親は病苦を忘れ。娘よく云ふた。稚い時から此母が。御寺参りの度毎に。因縁ならは女の子はさふいふ人に連れ添ふやら。云何なる家に嫁入るやら分らぬ故に。子供の時に悉皆聴聞しておけど。すゝめた甲斐が今あらはれ。分かるゝ母に勇みをつけ安心さして呉るとは。忝けないぞや嬉しいぞやと。親子夫婦が顔見合せ。此世彼世の愛別離苦。歎きの中の喜びは。此信心領解の身の仕合。

第三十三席

世の中の事は事々物々に。無常であると言ふ事が信せられます。自ら其無常をまぬかるゝと云ふ幸い迄があります。凡ての人の間違ひから。飛んだ苦勞を致しましたり。又損害にあいますには。皆大丈夫と思ふ常住の妄執から出てくる。不幸で御座います。さふか御若い方々も。澤山御参詣であります。若いと云ふ事が何時迄もあ

るものではありません。顔かたちのうつくしいのが何時迄もすたらぬと思ふはあやまりであります。彼の小野小町が「面影のかわらで年のつもれがと設ひ命にかぎりありとも」と申したれば。小式部は「面影のかわらざりせば云何計り。かわりてさへも惜しま命を」と返歌を致しましたそふであります。又彼の和泉式部は肥前の杵島郡錦浦と云ふ處に生れましたもので。後に故郷の友達が。さふか今一度あの奇麗な姿を見せて貰いたい。國へ歸つては下さるまいかと。頻りに手紙をやりましたら。式部が自分の若い時の姿を。押繪に致しまして其上に「故郷にかへる小袖の色くちて。錦の浦や杵島なるらん」と。一首の歌を詠で送りましたらと申しますが。盛者必衰會者定離は娑婆の習であります。云何なる高貴な方々でも。遁れ玉ふ事は出来ません。斯る道理が知れましたら。後生を願はずには居られますま

い。元より無常の身を以て。無常の世に住む御互でありますから。此ころも無常で。所謂人心不同如面一と申しまして。人々の心得が皆違ひます。違ひますから招く處の果報も。それく變つて参ります。是にも總報と別報とがありまして。同ト人間の果報にも。貧富貴賤吉凶禍福があります如く。鳥類でも畜類でも皆此通りであります。今生の因に依りまして。或は人天二乗の果を招くものもあり。又は淺間敷餓鬼畜生の生を感じる者もあります。無常と云ふ事を信せず居りますと。佛とも法とも知らずして。邪見我慢の淵に沈み。未來永劫生死の海に。漂はねはなりません。能くく無常の二字を味ふて。世の中を渡る考へを持ちませんと。病氣になつては藥代に困り。老て不如意を悔みましても。何の所詮もありません。そこを男は男女は女と。其身くく必ず無常と云ふ二字を忘れては

第三十四席

なりません「男と生れし上からは。かせぐをものうく思ふまど。かせぐは男の常ぞかし。女と生れし上からは。泣くをものうく思ふまど。泣は女の常ぞかし。かせぐも泣も若き時。はやくすまして又早く。眠る時節もあるぞかし」若い時に老ての考へ。盛なる時に衰へる考へ。有る時に無なる考へ。此世にありては未來の用意が肝要とあるが。佛様の御說法であります。

無常くと云へば何か縁起の悪い事の様だに思ひ。厭ぢや嫌ぢやと云はるゝ御方も御座いますが。決してそふ云ふ譯のものでは御座いません。無常の二字が明かに知られてさへありますれば。世の中に間違ひが出来ないと云ふても宜しい程の味ひがあります。若い時に年の寄る事を忘れず。盛なる時に衰ふる事を忘れず。有る時に無くな

ること。逢九時に別るゝこと。此世に在て來世の事を安心して置く
と云ふ。大丈夫な身の上となられます。所謂治に居て亂を忘れずの
風情で。裏店住居の者も。勉強すれば表店に出らるゝと云ふ樂みが
あります。凡夫を轉トて佛になるも。迷の境界から悟の境界とかわ
る。これ皆無常の世に生を受け九仕合と心得ましたら。無常の世程
結構なものはありません。此無常の二字を心得ぬものは。無常の
風に逢ひますと。七轉八倒の大騒を仕出すやら。金満家が忽ち身
代限をしますやら。夫婦わかれとなりますやら。家内に風波が起る
やら。大失敗の淵に沈むやら。今日からが面白く参りません。況や
未來は永々劫。泣かねばならぬ大變があります。無常の二字に驚き
の念を起し。出離の大事を聽聞じ。安心立命の境に達し。光明攝取
の身となりましたら。何つ何時無常の風に誘はれても。不定の娑婆

から常住の極樂へ轉宅し。快樂不退の仕合となります。此味ひをか
みわけて御覽なさい。實に御法聽聞と申す事は。人間境界の中に於
ても。一番大切な事でありますから。一大事と云ふは此れなりとも
以ての外の大事なりとも。我等が今度の一大事とも。御教化の事で
あります。此一大事たる我々の往生を。十劫の古へに御成就あらせ
られ。待て居るぞよくと。朝な夕な呼で下さるゝ。大悲の勅命が
取も直さず。南無阿彌陀佛の六字であります。其勅命の御喚聲が我
々の心中に至り届かせられ。往生は一定御助は治定と。御受の出來
たしるゝが。其儘口業に顯はれて。南無阿彌陀佛と相續するの
で。信じた我々の喜びより。信せさしてくたさるゝ往生の親様の喜
びは如何でありまじよふ。先徳の御言葉に。そもく法藏五劫に思
惟して父子相逢はん願ひを起し。彌陀十劫に證りを稱へて。父子相